

雪月花今様優染

55
196

091523-000-7

特12-256

雪月花今様優染

町田 宗七 / 刊

M24

DBN-2512



月雪花序

但 不 敵 天 君 父 の 仇 を 討 し 者 往 昔 建 入 曾 我 兄 弟 以 來 近 時 の 頃 迄 此
 類 擧 げ 難 し 雖 中 此 の 月 雪 花 の 如 き 仇 討 は 往 古 よ
 り 未 だ 聞 ず 吉 水 伴 左 衛 門 有 者 一 飯 の 恵 の 爲 め 百 年 の 命 を 棄
 り 室 内 左 内 を 自 盡 せ し 故 左 内 の 一 子 政 五 郎 父 の 仇 を 討 ん と 積
 む 年 苦 心 の 折 柄 娘 の 露 食 客 の 伴 三 亦 者 と 痴 情 を 起 し 其 後 露
 は 父 の 爲 め に 他 之 妻 と な り 後 ち 種 々 の 事 情 よ り 政 五 郎 終 に 果 さ
 す 身 事 聞 き 得 て 露 伴 三 俱 に 父 の 遺 命 を 繼 ぎ 優 苦 困 難
 の 後 ち 鎌 倉 に て 祖 父 の 仇 を 討 し 類 末 よ り 仇 吉 水 は 伴 三 の 實 父 の



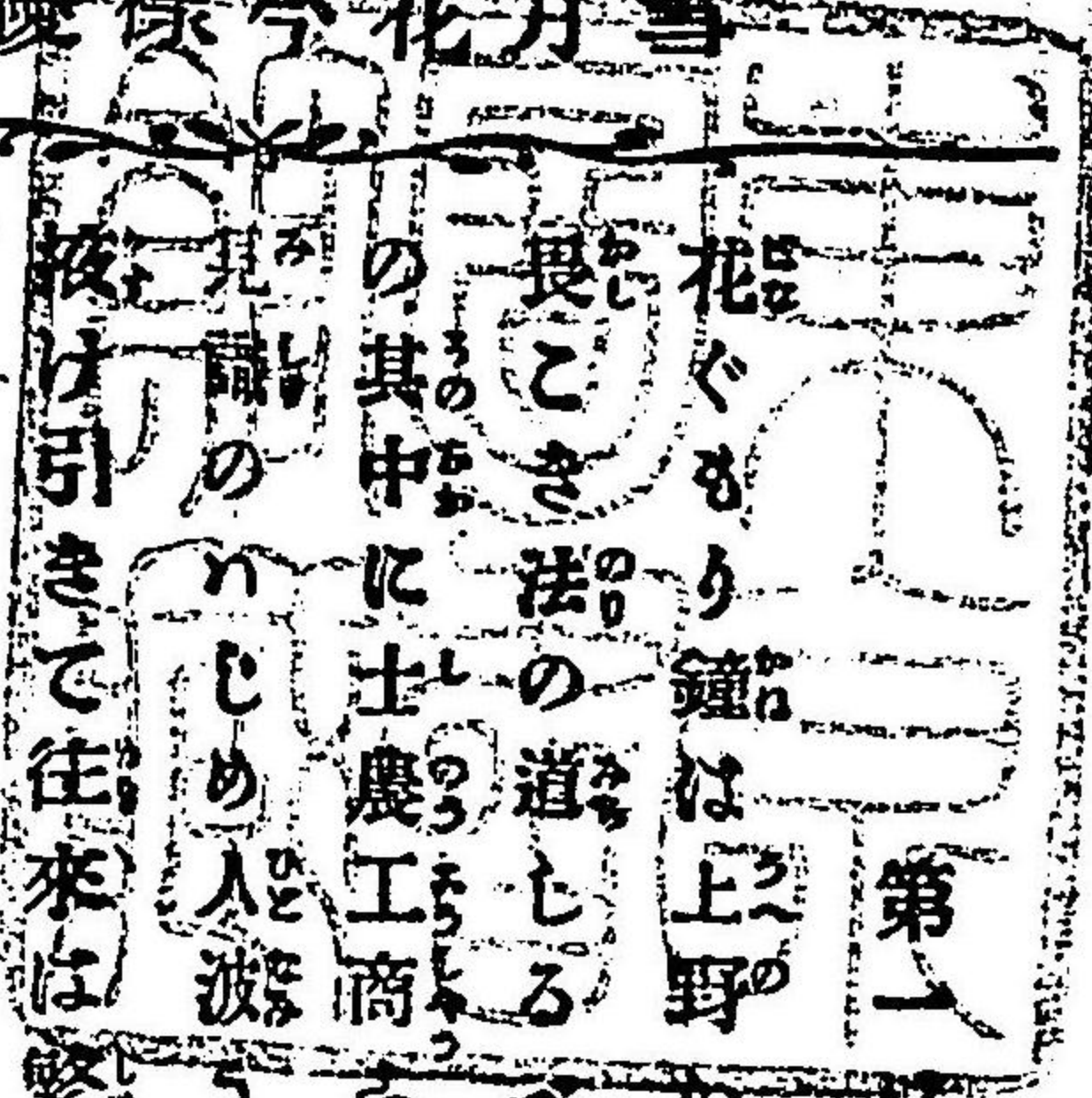


る事が知れ終に兩人一子を殘して菩提に入るなど魯文先生が實
 事を聞得以て之を簡明活場なる絶文に綴り一度新聞紙上に掲げ
 しより讀者幸に追慕し亦寄話とし珍説として喜びを爲す扶桑堂
 主人疾くも一冊子として世に公にせんとす予も此序の賣先を祝
 して仇討ならで品切に至らんとを江湖へ向つて助太刀心で序詞
 に換ると云

翠
 雄 睡す

●雪月花今様優染

雪月花今様優染



第一は淺草寺の茶店

花ぐもり鐘は上野の淺草か其淺草の淺からぬ大悲の誓かけまくも
 畏こき法の道しるべ諸願納受の靈佛へ參詣せんと群來る多く此人
 の其中に士農工商のきまぜて袖すりあふも他生の縁ふまれし足も
 其縁のいじり人波うてる雜沓に老は若きをふりかへり若きは老を
 掖げ引きて往來は緊き金龍山ふもとは四季に色かへぬ梅櫻桃李百
 卉千草ろの花園を逍遙りて今しも出來し二個の男一個は年の頃五
 十ばかりとも思ひしく其服裝を窺がへば結城の小袖に琉球の下着
 古渡り唐棧の羽織を着る黒縮緬の由兵衛頭巾を襟巻になしたるは
 問でも知るき富商の主人夫に附添ふ一個の男は是も年頃五十前後
 坊主頭首に雪踏穿き上装は黄入の甲斐絹裏下着は怪しげなる古む

たり更紗に全じく甲斐絹裏なるを着衾そのうへには御納戸色の十徳を羽織て右手に唐扇を揆々ならし左手を袖の内よ入て腋を斜に突張らせし前の主人の家に出入る幫間醫者にもありぬべし雖て花園を出はかれて観物小屋や楊弓店乞食芝居や大道講釋あれあれの中を歩行み二個は今しも観音堂の後ある茶店の前へかゝりし時から目早く見つけし茶店の婦人ヲヤマアおめづらしい珍庵さま御参詣でおざりますかマア鳥渡お寄なすつても能ではムりませぬかイヤあれはくおせん坊が迂架して見つけられた今日は此旦那さまのお供をして山谷の春慶院まで萬治高尾北墓参りと出掛た歸り百花園をぶらつきノ最早御歸館の道すがらサと見識あふたる會釋の容子を主人は早くも見て取てコレノ珍庵老萬治高尾はどうでも能が丁度足も草臥た爰で烟一吹ヤツて往うと床几へ掛れば茶店の婦人仕すまし顔の媚言愛嬌これはいく旦那さま能御参詣おそば

しましたマア今日も好お天氣でムりますサア珍庵さま貴老も此方へお掛おそばせ唯今お茶をさし上ますと聞がしうに周旋す口に間なき追従に水も湯と沸く賑はしき二個は床几に腰うち掛け南陣くもらせ居たる折観音堂の廻廊より下り來れる二個の女いま石段を二歩三歩徐々に降りるを目敏をも珍庵は仰ぎ見て急に主人の袖を引きモシ旦那さま暫爾あれを御覽なさりませぬれいノ美麗とく標致といひ能容いづこの人の娘なるかハア珍らしい白物じやナアト團十郎の身振口技をつかふ時お千は急須へ茶を入れて二個が前へ持きたりモシ旦那さまお茶を一ツめまわがれ

第二は幫間醫者の媒介

仁術なりと聞けたる醫師とは眞の表向き和漢蘭で盛る匙加減傷寒論も覺束なき村井珍庵が玄關かまへ土地の石町四丁目の裏新道の中程へ表札ばかりいかめしく何時も病家へ回診と云觸しては自宅

を出て幣間八分の珍庵が廣くもあらぬ奥の間に人待願の其處へ下
 傳のお鍋が立出て、先生へ申上ます唯今裏口へ一箇の女中が参り
 まして申上すには神田の明神下ら参りましたおさとし申すもの
 てムリですが昨日淺草で貴家の先生に拜顔かゝりましたが今日お
 晝過に御在宅と承まはつて上りましたのこと何ぞお心あたり
 のある方でおさりまするか聞て珍庵たちまちに自から座を立ち
 出迎へあれいゝおさとしさん能ころお出下すた何故また穢な
 裏口へお回りなされたサア、此方へ、と手を取るへて奥の間
 へ誘ひ入て彼是と茶煙艸盆を備めさせ臆ておさとしに打むかひ
 借おさとしさん昨日おまへに耳うちして今日おはあびを願つた譯は
 此珍庵が折入ての一ツのお願ひ實の昨日愚老が供を致して居た且
 那といふは此本町の大通りに藪々どかまへた大富隈最早若旦那も
 年頃ゆゑ家督を譲つて閑静お隠居したいと兼ての御用意何不足な

き御身分あるが去年の暮に御内方が没去た其後は僧更いそぐ隠居
 の仕度早頃は根岸の別荘へばかりお在であるがまた行朽た方で
 もなければ昨日圖らず淺草でおまへと同伴の娘を見て殊の外の御
 執心急かに愚老へのおたのみゆる情願してと思ふて居ると幸はひ
 同伴がおまへとはこれぞ渡りよ橋の上首尾免もわれおまねぎやし
 た上出来ないまでもおまへに委頼此媒介が整のへば愚老は素より
 おまへへもお禮の望みに任すと云ことナントおさとしさん願ひとい
 ふに此一條骨を折ては下さるまいかと引れて婦人は片頬に笑み何
 の御用かどぞんじましたらハア其おのちしでムリますか望み次第
 のお禮物を頂戴が出来ますから随分骨を折て見るおとは見ませう
 が何いたせ先方が石部金吉の堅氣の家是はなかゝの工風もので
 おさりますと首かたふけて一ト思案折から石町のときの鏡コーン

第三は伴三と露が密話

あゝにまた當時神田明神下に住むる政五郎と呼ぶ俠客あり彼の隨院金看板の流れを汲て義を泰山の重きに比し強きに恐れず弱きを助け慈愛れ心深かるより次第く子分も殖て終には一個の親分と世に立られしぞ名譽なる今日しも政五郎は子分を引連れ事の紛れの仲裁をかけ心にかゝる金の工面に朝より家を出し跡残れる子分も夫々に鬼の居ぬ間の洗湯や又は明神の地内なる茶店へ往きて遊ぶもあり留守に娘のお露とて年も二八か二九から花のさかりの優姿その愛嬌の露の玉笑まばこぼるゝ風情にて下女のおかまを呼び近づけおまへアノ勝手の用が濟だから前刻たのんだ買物を今の内に做て来ておくれと云つゝ火鉢の引出より取出し渡す一朱銀二ツ三ツを紙に包み尙風呂敷まで取添ゆれば下婦の返辭と諸共に帯引締て出て往く四下見まはし打點頭急ぎ一ト間の理に入ば

久しい此家の食客義理ある子分の伴三とて未だ年わかき優男朱に交はりし破落戸の下界な容姿は做て居ても何處やら高き氣位は由あり氣にぞ思はれける娘お露は悄悄と伴三の側近く寄添て吻と一ト息つくくと男郎の顔をうちながめ物をも云でほろくと落す涙の玉あられ碎くるばかりの胸なであるし伴さん妾しや心配であらぬ哩なトいはれて男郎も吐息つき其心配は察して居れど力づくにも往ぬが金トはいへ是まで須彌菩薩海重なる恩を受ながらの大恩ある親分の難義も救へぬ不甲斐なさ加之ならず疊頃からおまへと斯した交情よなりすまぬ事とは知りながら日増に深く成たも露縁るれやこれやを考がへれば此腸も断れるばかり如何趣法はあるまいかと思案の折に聞とはさく前刻はおれの小亭でおさとおまへが密々話し其孝心をおもひやりつくく我身も感心した嫌であらうが暫時の間根岸とやらの別荘へ妾に往ても聲最らしはしはど

もに忍び泣きお露は懸て頭首を掻げろんから前刻おさとの話し
 を聞いていびざりましたか實はおまへに其事を相談しやうとおもふ
 たれど若も不實な女だとさげすまれはせまいかと妾しやアそれが
 心配で今まで嘶しもせあんだが愛い別離も親の爲妾になるは厭は
 ねど萬一期と聞したらおまへに愛想を盡されうかと案じ過し此
 胸も今のおまへの言葉を聞き漸々安堵の爲たものゝアノ物堅い親
 父の氣質たどへいか程手詰つても世間へ顔を賣る家業とても明し
 ては得心しまいとはいへ急場要るお金わたしの爲に親父さらお
 まへにも又義理ある親恩愛二ツの此瀬戸際あどて叱言を云れうと
 も伴さん妾しは覺悟ぢやぞエ

第四は裏借家の因縁

あゝは神田の明神下表は筆屋と蠟燭屋その裏借家の取付あるハ女
 髮結あさどが住居せまくはあれど小奇麗に取片付し一間の裡に高

慢顔なる村井珍庵おさどが咄を聞をはり小膝を拍て感心しイヤ
 どうも恐れ入た娘の心底愚老感服仕まつた親御が差當つての難
 義を見かね目から親子の縁を斷妾に出やうといふ孝心實以て珍庵
 も坐ろに落涙いたしました併し乍ら是といふのも全たくおさどさ
 んのお骨折早う此ことを先方へ話したら嘸かしよろあぶ事でおさ
 らう先大根は夫で宜いとして今其入用の金額はおさどさん何の位
 ト問ばおさどはすり寄てるの入用のお金も高は二百兩とやすると
 ト残らず言葉も終らぬ中珍庵は興覺顔ナニかの大枚二百兩と壓氣
 に取れて居るを見ておさどは少し眼に稜立て若し珍庵さま今二百
 兩とお聞なすつて何にも仰しやいませぬからお金が出来ぬのでお
 ざりますか今も今とて内々でおあかしやした此方の親許縁断てま
 てアノ娘か貴公の方へ往氣に成たを今さらお金で澁るなら此お話
 しの破しませうと云れて珍庵遠かの狼狽あれさくおさどさん何

雪月花今様優染

も爾端の怒つたものではない是までにはなにも運び今おまへに怒られては愚老を始めおまへまで骨折甲斐もないと云もの金の多少は相談づまで夫は何とかなりませうと濁つた言葉をおさどいどがめ何と仰しやる珍庵さん柳原の露店や村松町の古若屋なら直のかけ引も做ませうが實意から出た此方の断し索はといへば貴老から強ておたのみなされた故做悪い話しを是までに漸々做あげた今とありお金の高で愚圖つくなら妾しやアあゝて手を引ませうといはれて珍庵ますく困りこれは愚老が言葉の過まりいかにもおまへの云通り平に御用捨御勘辨これ此通りと手を突て坊主頭を盛にすりつけ頻りに謝て居る折から御免なさいと入きたる男の聲におさどは立ち出て障子左右へあしあくる機会に見合す内と外珍庵慌忙はしり出でこれは本町の若旦那如何してあゝへ

第五は息子が大腹中

雪月花今様優染

おさどは夫ど心に猜しまづくこれへと請すれば最懇切に會釋して上座に着きし温和しと珍庵の頓首百拜シテ若旦那にのさどさんと豫て御懇意でふりましたか不思議なことも云をうち消しいや決して爾ではないト云ゆゑ更におさどに對ひ甚はだ失禮ではござりませんが卒爾にあきたへ参りましたは此珍庵が見識の者姓名の追て申し上れば以後御懇意にねがひまする夫はさておき珍庵老今おはなしの二百兩親父に代つて私から早々此方へ届ける程にはやう取極て貰ひたいおさどさんにも種々御心配をかけたましたト云れて珍庵薄氣味わるくそれをあかたが如何して御ぞんじイヤ其御不審は御道理實は頃日親父の許へ貴老が折々見えられて何やら密々御相談是には様子のある事ならん段々親がひ見し處親父の隠居のおもひたら夫に付て是々聞て私も安堵のおもひ貴老もかねて知る通り親父は日頃壯健な身體殊に年さへまだ五十を今年

漸く越たばかり去年あふくろに別れてから側妾も置ねば何かにつ
 け無不自由あるであらうと豫々おもふて居たところ夫ときいて
 願ふた壺情願氣に適た女があらば決して私へ御遠慮あくお世話を
 おたのみやます實は前刻の事で石町へ上った處先生には唯いま
 病家へ御見舞においでと聞き直さま跡より追かけしに折よく後姿
 を見つけ段々躡て此方へ來り入待ふりして門口に立ぎましたは今
 の一條二百兩と大金ながら娘の孝心親父の望み双方金でどい
 どあればあんな嬉しい事はないトハいへるに一ツのおたのみ珍
 庵老には知るゝ通り店に多くの人も使へば成べく内外の人々へ極
 内分に願ひたいと云つゝ懷裡かきさぐり金一包を取出し今日は生
 憎もち合せも手うすゆる支度金の十分一こゝに持參の甘雨の後で
 違變のないやうにおさどさんへの私が証據猶またお禮の私から乾
 度申しあげませうと親孝行の息子ののらひ大腹中に兩個の感じ

たいく何の言葉もあく委細承知と夕まぐれ路次の溝板がたつか
 せてあぶらげ願もどき焼豆腐トツイく

第六の峯の松か豪力

あゝにまた明神下なる政五郎が甚く心を悩まし居る金兩の入用の
 ろの原因の大概を記さんに有一日政五郎の子分を引連れ俱に本所
 邊へ往たる歸り今しも兩國橋を通りかゝるに遽かに往來騒立てッ
 レ喧嘩よと取のやしたちと聚まる人の山實に堵の如き群衆の見
 物政五郎も子分の者も喧嘩の状勢を見さするに早くも戻りて報道
 るやう親分大變が出来ました一個は屋敷の仲間らしく又その敵手
 は去年の秋自家から頼んで相撲にした不知火關の門弟の峯の松大
 次郎で喧嘩のあまりの分明ねど腕力に任せて搦ったので其仲間
 おねた様子其首へ武士が顯はれて峯の松を捕て押へ屋敷へ引て行
 くとの騒動アレく前途へ峯の松が其武士にひかれて往くと聞て

急かに政五郎が下駄を棄てて子分に持せ其場へ早くも駆付て武士
 に一禮し質は是ある無法者は俺し奴が身内の者不埒の段は幾重に
 も卜賠語る其間に子分へ吩咐氣を失なひし仲間を惣籠に打乗せ近
 處なる町醫の方へ昇込ませ厚く介抱たのみしに予其甲斐ありて漸
 々に蘇生はなせど惣身の痛みは急に癒ざりしと然ればまた子分の
 者は政五郎の指押どほり先魁がへりし仲間を明神下の家へ連込み
 十分醫療を盡し居る中政五郎は段々ど望の松の詫話を入るに却々
 武士は聞入らず我家來を討殺せし悪くい奴屋敷へ引て討にするど
 弱きを赫す權柄も地獄の沙汰の何とやら佛になりし仲間の誕生り
 しに氣も折て始めは僅かの療治代にて紛紜の糸も解かりしに中
 ころ仲間を屋敷へ引取終に養生叶はずして死去せし由を云がり
 敵手をわたすか或ひは又解死人料を二百兩耳を捕へて渡すかと退
 引ならぬ掛合に政五郎も當惑なせど一旦救ふて我家へ連戻りし畢

の松何とて先方へりたさるべき去とて頃日の不手廻り二百兩の才
 覺は目的もなければ一人一人助くる料と承知して金兩の工面の其間
 五日の日延をたのみ込み只管賠話を入れおきたりとぞ記者まうす
 此文中の武士の姓名仔細ありて爰に記さず看官怪しむ事なかれ

第七は政五郎が手詰

諸行無常と告わたる東嶽山の晚鐘は胸に響きて兎や角と金の工面
 に當惑の政五郎が心づかひ愈々今宵とせり詰り第五日目の夕まぐ
 れ奥の一間に腕又ぬき尋思も今は盡はてし烟艸も咽喉へ通らぬ
 心痛若屋敷より來られなば何と返辭を爲んものぞと流石強氣の政
 五郎も悄然として居たりし折から人さまのたゞすまひ隣家は
 今日しも日の中より花見の宴の客來に唄ひつ舞つ大隅氣日暮てよ
 りは太棹に聲を自慢の義太夫節我おもしろの千兩鐵跡に猪名川諸
 手を組み思案に暮て居たりしが(詞段々日限の切た跡金親方が促催

するも九平太か皆所爲兎角鉄ヶ嶽を抱込で彼方の身受を延して貰ふより外はあいと語るを聞て政五郎長大息つくく。獨り言折も折どて隣家でかたる千兩職アノ猪名川もコノ政五郎も同じ様ぢ手詰の難儀外の事なら兎も角を力つくにも後ぬが金隠如何したらよからうかど只管案じ艱める折しも子分の奴が慌忙しく奥の障子を引あけて親分あゝに居なすつてか今表の口へお侍が來なすつて政五郎は在宅か小石川より参ッ。金丸應十郎と申すものだト權柄顔に云込だが何と云て歸しやせうかと容子知らぬは何氣なく執次子分が言葉聞き借はどおもへど温和にナニ金丸さまのお出どか此方へお連申してくりヤト口では云ど心の裡何と此場を云のがれんや胸の六也九也押かくし待間わらせず徐々と刀引さか入來る金丸は會釋をすまし急に政五郎に打むかひ借すすまでもなき約定の二百金今日入相の頃及まで待居しが何の沙汰もなかりしゆる自から受

取の爲推参いふした卒政五郎どのあわたしめれ卒々お受取やさんと追れど何の返辭もなく差俯伏て居るを見て金丸は少し急ぎ立ちコソサく政五郎どの如何なされた其方はよるや約束を忘れはせまいか那程までに念を押し今日より五日程お日延を下だすつたら屹度其の日の夕暮までに此方より持参いたすと堅々誓ふた身代金返辭があくてハ出來ぬといふのかコソサく政五郎どのクメくするにも程がある返答させへ返答させへ

第八は二百兩の才覺

折から又も隣家の淨瑠璃どいへ名取の鐵ヶ嶽どう魂胆してなり共投ぬばあらぬ晴の角力いハト一生懸命大事の角力を金ゆゑにフツてやる猪名川の心の内の切なき汚なき塵世支天にも見はなされ角力冥加に盡たるかと思はず拳をにぎり詰身をふもはして男泣きどかたる此方の紙門の蔭に始終を立聞く峯の松これ迄とても海山

の大恩うけし親分へ難義を懸し切なき憂さ寧ろ一ト間へ踏込で金
 九奴を研て棄て此身も其場で腹掻研當座の難義をすくはふか又は
 親分への分疏に今此どころで切腹し生甲斐もない此命を役に立る
 も一ツの策畧最期成ては猶豫もあらずいづれにして敵手の者の容
 子に因て一か二か死ぬより外の覺悟はないと胸を決めて痛やかに
 窺ひ居るども毫知ず金丸はいよゝ急立ちいま此土地に隠れのな
 い明神の政五郎ども云るゝものが僅かばかりの金に手詰り物さへ
 いへぬ此容態は聞たほどにもない笑止さ早此上は容赦のいたさぬ
 二百兩が出来ぬとわらば不足ながらも其方の首を此金丸が受取り
 ゆかん覺悟いたせし立あかるを政五郎の静かに制し何と仰せらる
 りとも重々濟ぬ事ながら實は少ゝの手違ひからまだ才覺も出来さ
 る旨義金子が出来ずば此首をと御立腹もさることながら四十を越
 た親父が首直打なければ死甲斐なし唯此上のお願ひにの今一日の

御猶豫をト兩手を突てたのみ入る弱身に付込む立丸が却々肯ぬ傍
 若無人いはふやうない不埒な奴いよゝ金が出来ぬとわらば猶豫
 のさらぬ首わたせし小膝をすゝめて詰よする嵐の前の櫻花いども
 危ふき其折から右と左りに窺ふ人影誰ぞと尤むる聲の下まろび入
 たる一個の婦人兩個が前へ二包の金置さらべ息つきあへずサア
 親分やし付つた二百兩唯今取て参りましたト云顔ながめて政五郎
 誰かとおもへばおさとさん合點のゆかね此金子と半分いのせず打
 消してアノマア親分が何云て居なさることかおまへが前刻吩咐た
 ゆゑ受取て来た此お金早う其處をお侍にわたして事を濟しなされ
 跡で合點はゆきます事と仔細あり氣な言葉の端々紙門の外には嵐
 の松が目釘濕して今すでに忍びかねてや研入んず此時おそし彼時
 はやし我より先に一個の婦人あいた敷其場へ駈入りおもひも寄
 らぬ金子の才覺合點ゆかねと氣を沈め躊躇居たる那方には政五郎は

床の間ある花立臺を取きたり其處ある金子二包を載せて金丸が前へ突出しお約束の二百兩大きに延引致しました卒お受取下さりませ

第九は妾宅の密會

細竹群の忍ヶ岡の樹下影かさに籠てお管の根の根岸の里の中程に松板塀の一トかまへ見越の唯松唯一樹くねりて見ゆる庭の外内ぞゆかしき家作りは唯目に視ても何某の別荘どこぞ知れけれ折しもこゝへ來かゝる男郎四下うかいひ竊やかに船板塀へ身を寄て内の様子を聞すまし耳もどちかく鐘々ど撞出す鐘を指折て數ふる時しも空に照る月は漸々傾ふきて上野の山の蔭にかくれ物の黒白も分らぬと世を忍ぶ身か手巾にて面を深く包みたるが何やら張り照頭つゝ小石ひらふて相圖の礫内の雨戸へ投付れば壁て雨戸を密と押めけ飛石傳ひ用樋口の雨戸の鎖鑰取外し互ひに顔を見合してヲ

伴さんかまち兼たト跡の得いはず手を取て忽地内へ引入れ開扉をそのまゝ押付て雨戸の隙より我座敷へ椽側づたひに誘引へは男は漸々胸赤で下し頬單せし手拭と端折し裙を取外し四邊見まはし坐に直りて吻と一ト息忍び聲ヲ、へらぼうに怖かつたが少し是で落着た時に露さん數へて見れば半年あまりおまへが家を出られた後は朝夕親分の顔見るたび心の中がおもひやられ逢たい見たいも身を恥て今日まで辛抱して居たが幾度とないおまへの文殊に今夜は至極の首尾逢ねばならぬ用があるとは若も身體に障碍でも出來いせぬりと漸々に時刻を置つて忍んで來たが用事と云い如何いふ事と尋ねる男の顔うち詠めサア其用事は頃日から文にも書て上た通り妾も父さんの名前があるゆる愛いかかしい辛抱を今日が今日まで做し居たが愚事千里の世のたどへ四五日前に帶する時産婆に頼付れ何でも月が違つて居ると内々旦那に話した故か忽地旦那も

疑がひはじめ夫から急に機嫌を損ね二三日は最出ても来ず夫を
 兎や角あらしうても所詮明白は立まいから寧ろその事と覺悟して妻
 一や此家を逃出す覺悟おまへの心が變らずば情願一緒に連のいて
 三日なりとも夫婦とよばれ胎内の小兒を産おどし川と云字で暮す
 がたのしみ急き用とは此相談おまへ否でいあるまいねト云れて伴
 三打うあづぎ夫ではあるの旦那どのや親分に濟さいがおまへが其
 氣に成たから直にも爰を連れて退うが何處へゆくにも入るの金そ
 の用心はあるまいなど問は露は嬉しげに爾きいて妻も安堵別に
 お金はたくはへねと頭髪や物や帯衣装もひらひらした敷あれば那
 品を持っては往けまいか子一金がなければ其品物を引替負る丈背負
 てゆかふ十二次の間の篋笥にかど今しも男女は立あがり隔ての紙
 門を明んとせし時誰とは知らず聲高く盜賊待矣

第十は男女の亡命

呼かけられて伴三もお露も咄嗟と驚ろきあきれ那方を等しく見か
 へれば紙門左右へ押あけて顯はれ出たる一個の男お露は見るとより
 度を失なひや、本町の番頭さんと逃んとするを善六の逃しもやら
 んぞ踏込で帯際とらへて動かさず猶伴三をも引据えて四下に響く銅
 摩聲汝等は能もく大旦那の目を掠め不埒な所業を働らき居たな
 斯事事もあらうかと忠義一圖の善六が内々見舞網の目に罹ったか
 らの百年目兩個を是から番屋までしよびいて往から覺悟しろト金
 つぼ腹に睨みつけお露が帯の下締の細紐といて伴三を搦め取んと
 葬めくにぞ血氣の伴三胸にすゑ難ねおのれ小癪な口を叩き入さる
 手出しを爲やアがると此方も黙止ちや置ねへぞサアしぼるなら縛
 ヲて呉れサア突出すなら突出せト腕つきはらせし勢ほひに微きと
 もせざる番頭善六ヲ、望みなら細をかけ懲戒の爲突出すから其時
 吠づらかわくなよト細紐取て立かゝるを爾のさせじと伴三が拳を

固めて立むかふ折から又も次の間より静かにせよと聲を被け走り
 出つゝ善六を制して其處に立たるをおつゆは誰ぞと怖々に窺ひ見
 れば其人は本町の若主人由次郎にてありしかばいよく進退極ま
 りて顔も得あらず伏沈めば伴三も氣おくれして後おみすれば那方
 ある善六は不審顔あれいゝ若旦那のマア深更に如何して爰へ
 と問れて屹と言葉に稜だて親の顔にも關はる大事子として家に臥
 て居られうぞト云つゝ此方に打むかひコリヤ其處な兩個のもの憎
 むべき今宵の所業言分のある奴等なれどかゝる事の世に洩せば父
 の外聞家の恥辱暖簾の瑕瑾もなることゆゑ何にも言はずにゆるし
 てやる望通りも兩個してトットと此家を出て往けと云を側から善
 六があれゝ若旦那さまコリヤあまりお慈悲過るとすすもの此お
 露にの善六が疾から心と半分云かけ否々疾から怪しい素振がある
 と白眼だ腫にちがひなくアノ大胆にも僧夫を引入れ主人の目まで

盗んだ盗人たい此まゝにゆるしては却つてお爲になりすまいと
 止るを肯ぬ由次郎何を做やうと大きなお世話番頭どのゝ兎や角と
 口を入べき處でさいト引込で居たがよい

第十一は番頭が横車

胸に巧みし算當の桁が違ふて番頭善六腹だゝしさと口惜さに再回
 其首へのさり出てヤイゝゝな盗人野郎耳を穿つて能く聞け今宵若
 旦那のお出がなくば汝等兩個を引くゝり上へ突出す處で有たが何
 の譯やら若旦那が異訝な處へ顔を出し叱言もいひずには追出すとは
 汝等いまた仕合せものだサアそあお露とやらも最お暇が出たか
 らの盗人野郎に手を引れ何處へなりとも出てうせぬかと惡口され
 て伴三が腹にすゑ兼ね此方にむかひだまッて居れば宜かとおもひ
 汝いらざる其惡口今其口から我身を指して盗人と云たのは何を証
 據に云たのだ聞ずてならぬ汝が言葉サア其盗人の証據をあかせ返

答次第で番頭とて用捨のせぬぞト教國は番頭善六せしら笑ひ盗人
 猛々しいとは汝が事だ現在今宵もこの深更に他の住居へ忍び入り
 婦人をうぼふて逃んどしたの是第一の汝か悪心夫のみならず路費
 の料に衣服までも持たさんと既に一ト間へ踏込む處此番頭に見
 咎められ仰天したを忘れたかサア夫ゆるに汝をば盗人野郎と云た
 のだと鼻轟めかして罵示せば最前よりも泣伏して物も云言で居た
 りしお露泪はらうて進み出てモ善六さんるれで口が過やうぞ
 エ爰に居る伴三さんは豫て妾しと夫婦の約束いはし亭主も同じと
 と左すれば妾しの身には御主人様の其外に亭主ある身へ大胆たお
 まへは度々忍んで来て袖襟を引く横戀慕若も妾が靡いたならおま
 へは主人の妾をも盗む所存でござらうがな爾して見れば伴三さんを
 盗人とは云せぬぞエサア最一言いはしやんせ何かの役に立うかと
 取て置たおまへの艶書あへ出して讀ませうかと云れて驚ろく善

六を後目にかけて由次郎暇を出した其處ある婦人何にもいはずに
 早う往けト促がされしに心づき伴三お露は情々と切戸口より出ん
 とするを兩人待と呼とめられ反顧機會に投付る品を伴三片手に受
 とめありや是金と云せも果ず路用の手當に僅かの金手斷の印に持
 て往けろんから罪ある妾へまでお情ぶかい此おめぐみト云語を繼
 で伴三も金包をおしいたいきわりのがたうござります

第十二はあさどが懇切

さてお露の伴三と俱に根岸は出はなれても寄邊いつこと定めぬ
 は人目忍ぶヶ岡ついき輪回も深き車坂其下道を悄悄と逃れど足は
 掛どらず濡るも裾の露ならで心おく身は雨空に亂れて渡る雁さへ
 も若追人がど驚ろかれ胸をいためて漸々と下谷も過て底知れぬ和
 泉橋を打渡り糸よりかへる柳原土堤をつたうて伴三が少しの知音
 は神田なる久右衛門町にあるを尋づね云々の譯柄と一伍一什を打

ちあかしたのめば人の情にて同所の裏家を假住居すまぬ月日を送るうち露はさすが女氣の心ぼろさに堪かねて右一夜ひろかに唯ひとりお里の家(明神下)へ忍びゆき其の身の罪をふかく謝び猶ほ其の後の容子を聞くにあさとも露が彼是の苦勞を深く察し遣り厚く勞はり慰さめて竊かに露に言へるやういつぞや和女と伴さんが根岸を立のき成された時其の翌日よ本町の若旦那がいてにあり昨夜斯々云々と聞いて吃驚いたしましたが有繋は本町の藥種問屋玉城芳右衛門といはるゝほどの富限者だけ外に何にも仰しやらずどうぞ露が所在をたづね尋につくした孝行を今度の不義の債のひみ親父へ謝罪をたのむとの難有すぎた其のお言葉お世話すした妾しさへ泪のあぼれる嬉しさに肝腎かなめのお兩個の在方知れぬば途方に暮れ隠しもされぬば内々に体よく其の場をこしらへて直ぐ親分へいなした處唯長太息のみ何にも云す夫より那地此地

たづねる中久右衛門町の裏借家に兩個ひそんで居なさると聞て妾しも漸々安堵また親分へも其事を内々お報道したら妾しへ義理に怒りの言葉いや縁断た娘と子分必らずかまふて下さるまじと口には云ど兩の眼に泪うかめし親娘の愛着心の裡をお察しやし妾も袖をぬらししました思案の外とは云ながら伴さんとても海山の恩を重ねた親分の顔を潰した今度の始末何ぞ其内蔭ながら一ツの功でも立たなら足ずながらも妾からお謝を入れて見ませうからお兩個ともに暫時の間御辛抱なされませ殊にあかたは臨月に最早あひだも無いお身随分大切になされませト粹も不粹も結わけ一毛筋の通るくらう人言葉の綾も心切に櫛の齒とほす老實しとお露は始終の話しを聞き漸々安堵のおもひをなし泪ぬぐひつ胸なであるし何あら何までおさとさん御恩は死でも忘れません

第十三は政五郎が病癒

不題またお露の親父明神の政五郎の有一夜飯田町邊の何某方お晴
 の勝負ある由にて子分を連れて出向きしが其夜は手合のあしかりし
 迎他より前に歸りし途中駕籠には乗どばらくと時雨に逢たる悪
 寒より終に病病を惹起し枕に就て其まよ二三日は起る得ざれど
 素より當坐の恙とおもひ其身を始め子分まで格別氣にもかけざり
 しが病質殊にあしかりしか五日過ども七日経ども更に醫藥の効も
 なく唯日にまして身體の病おどろへるばうりなれば那峯の松を初
 どして其他の子分の氣を惱まし神に佛に親分の病氣全快を祈請す
 れど早政五郎が命數の將に盡んとする處が更に神佛の加護さへ見
 えずいよ／＼危篤に赴むきて醫師の診斷も今のはやたのみ少な
 成たるにぞ子分の心痛大方あらず取分け峰の松大次郎には夜とな
 く晝とあく政五郎が枕邊を離れやらすかゝる時ころ豫て受たる恩
 がへしと夜の目も寝ず看病居るを病者も嬉しくおもひ遣り苦しき

中にも氣を包て外の子分を故と遠ざけ峰の松に睡くやうそなたも
 豫て知ての通り娘お露は難の頃一旦他の妾とまでなり我身と其方
 の難義を救ひ殊に我名を大切とおもひ子より親への縁断たれば其
 健氣さに此親も子分の手前世間の義理に心で墜ても顔へさへ毫し
 も出さぬ我子の愛情其後聞ば根岸を出て伴三と夫婦になり何處に
 か潛んで居るとの事思案の外と云ながら伴三といひお露といひ
 如何なればおそ此やうな情ない事爲出して我身に苦勞をかくる事
 か斯して日々衰弱につけ兩個を呼て密々に言遣し度おともあれど
 呼に呼れぬ俠客の意地夫には豫て懸ころな女髪結おさどこそ跡を
 頼むに手堅い女那的よりお露と伴三へ傳へさせたい用事もあれば
 今夜竊かに裏口から四の鐘を相圖にして來て呉るやう其方から早
 うおさどへ頼んで呉ト云も子故の愛着心峰の松は親分が言葉の端
 々親しく聞心中深く察しやりて獨り何やら心に照頭き親分心配做

なさいますな篤くり俺が呑込ました

第十四は親子の愛情

峰の松は政五郎が最も切ある吩咐を心に領めて其臍昏獨りおさとの家へ往き此二三日は親分の容体も益々わるく殊に待たら危ないど内々醫師も當惑顔就ていあまへも知ての通り日外俺が兩國で喧嘩を做たが始まりで飛だ出入を引起し親分ばかりか娘御の露さんまで難義を懸け夫が根になり其後は親子の縁も到底きれど夫をおもへば朝夕に此身で出来る事ならばたどへ骨身を粹いても再回縁を繋ぎ止めお露さんをも呼もどし親子一處に置たいと思ふばありに月日を送り明日をも待ぬ今日の有様前別親分が俺を呼寄斯々云々との吩咐はあまへにたれんで息ある中お露さんと伴さんに逢たいどの言葉の謎々解ねば濟口俺が奉公四ツの鏡を相圖にして外の子分を次へ下げ人此出入を停置けは情願あまへはお露さん

胸苦しき長大息つくづくおさどが顔熱と見つむる雨の眼に涙す涙の露の玉物は云ねど子をおもふ愛着の情願はれて見も隣れどもらひ泣き懸ておさどは兩個と共に枕邊ちかく膝行奇り親分御容體は如何でござります此二三日は氣候もわるく尋常の人でさへ身体に障る位ゆる定めし御病氣に障った事でござりませう情願篤くり療治をして早う全快て下さりませといへば政五郎は頭を悼りかたじけない其言葉私にも病病に勝たひとは思ふて居れど今度は逆も助かるまい生者必滅とやら云てどうせ死なねばならぬ身此身は少しも惜からねど跡にト一言いひさして涙に咽るを見るよりもお露の堪らず進み寄り側に有合ふ煎藥の冷しを取て參らすれば政五郎は嬉しさに其手を緊と握り詰め父子目と目の泪川せき止めかねし風情なり稍あつて政五郎はお露を元の座に戻し故と見る目を打ふさぎモシおさどさん此政五郎が息ある中おまへにたのんで置たい事



の二ツ三ツある中に他人へ云れぬ大事もあれば若も娘と伴三か具人間に成たから此場の私が遺言を跡で兩個へ篤くりとどうぞ傳へて下されませ

第十六は病者の遺言

おさとは病者の言葉を聞き好機會ありと小膝をすゝめられは最親分の吩咐なれば何なりとも勤めますが今日は妾しが折入て親分へ一ツのお願いは是まで度々お謝をした兩個の者の身の過失どうぞ恕して下さりませ天にも地にも親一人の頼憑すくないお露さん現在親御の大病を看護も出来ぬ情なき伴さんとても同じこと思案の外淫行も是には深い譯あつて恩に叛いた若氣のあやまり不孝不忠の其元を糺せば曇りも晴る身の上どうぞ不便とおぼしめし恕すど唯た一ト言のお言葉かけて下さらば假令一日半夜でも暗て看護も出来ませうト頼む陸より兩人もどうぞ慈悲に恕しとト両手を合

を裏口から連れて往て下されと聞てお里も哀れを催ほし快客を磨く親分も子分の前や世間を包口に云ねば猶さらには心の中もおもひ遣れ無胸ぐるしい事であらう夫でなくとも折があらば内々お謝を入れ度と疾からおもつて居た處ろ左程容体が悪いとあらば今から直に久右衛門町へ妾が往て話しをきかせ兩個を連れて往きますほどにおまへは早く自家へかへり親分を大切な能う看病をたのみますト云れてうなづく蜂の松去ばとばかり暇を告ぐおさと此家を歸り去る跡におさとは仕度をあし道を急いで久右衛門町へ尋ねて見れば幸ひに兩個は自家に居たりしかば會釋そあゝ是々ど前の次第を物語れば兩個は悲しき遺方なく殊にお露の血縁の肉親若も事有たなら顔見る事も叶はぬかと愛ひ歎くをおさとは慰さめ久し振ての對面に歎くは却つて不吉の基是ら往ば那是四時にもなりませうト云れて兩個は取敢ずおさどが後に附そうて明神下なる

家へ往くに折しも響く鐘の聲陰に籠ッそホーンく

第十五は病床の悲歎

鳥の將に死さんとす其啼く聲かなしく人の將に死なんとす其言もど善しとかや却説明神の政五郎の爰に命盡たるにや病瘳の益々募り來て早旦夕に迫りし危ふさ藥石効を奏せされば其身は覺悟を爲し居れど責て息ある其中に娘お露に蔭ながら逢て大事を遺言さんと病苦を押へて待居る時しも早打いたす四時の鐘耳元近く聞ゆれば峰の松は機軸を利し外の子分を引つれて病間を故と違さかる跡又隔ての蒸襖を靜かに明てしとやかにあさは政五郎に打むかひ親分あさどでおざりますト云聲きいて政五郎心の中の嬉しさ悲しさを漸々重き枕を擡げテ、待兼て居たあさどさんサアく近うと云あがら那方を見れば伴三と露は塵へ頭首を下々物も得いでて蕭々と泣伏居るを見るよりもテ、伴三かお露かど云よいはれ

世謝入るを政五郎は見て見ぬふり聞ても聞ぬ素振をなし何をいやるぞあさどさん病衰けても政五郎親に不孝をした娘世間へ不義理をした子分は病氣の看護はたのみませぬ折角あまへの謝罪なれど今さら兩個を家へ入ては玉城とやらへの義理も立ず且世間の人の所思外の子分の訓示も付ぬば是はッかりは聞れぬが今をも知れぬ此身の重症若も私が没去たらト又も涙に咽入しが纏て苦しき息を吐き今もあまへに兩個の者へたのむト云た傳言は誰にも言ぬ私が素性其處に居る若い方も能聞て下されや素此私は下總の佐倉を領せし堀田の家の中室内左内が獨り男父の左内は江戸詰にて殿への忠勤怠たる事なくお小納戸の役をつとめ殊に御覺え愛たかりしが私が十五の年の春父の左内は殿さまより御國元の御家老へ下され物の御使者の役目若黨仲間引つれて江戸の邸第を出發し下總佐倉へ急ぐ途次同國大和田驛の本陣へ一泊し旅珍らしき風景を彼地

此地へ打ながめ其夜は晝の勞れを引き主従枕に就くと其まゝ前後も知らず熟睡せし隙を窺ふ曲漢の何處よりか忍び入れん佐内が臥床の床の間に直し置たる恩賜の一口防門信國の短刀を盗み去んとせし處を父は早くも目をさまし夫と見るより途たゞしく寐衣のまゝに跳起て其曲漢の跡追かけ取さしゆるを振はらう其物音を聞つけて若黨も處其へ立出で前後を圍めど事どもせぬ其曲漢の大胆不敵飽まで手強きふるまひに憎くき奴と父左内が一刀引ぬき切られば曲漢もまた振合せ庭の大樹を小楯に取り火花を散せし闇夜のたゝかひ互ひに窺がふ虚々實々

第十七は病中の物語

斯と見るより若黨も同じく白刃うち振て父と共に切かくる両箇の敵手を左右に支へ雲時たゞかふ曲漢は尋常一様の盜賊ならず防ぎあがらも太刀風此鋭どき手練を顯しして終に若黨へ深創を負せ咄

嗟と驚ろく父左内が猿猴の間に身を跳らせ小楯に取たる大樹の松へ恰かも猿猴の木備ふ如く鬨をかすめて攀登り塀を足代に逃出すを追んとすれど庭内の勝手知れぬは焦燥のみ漸々切戸を押ひらき塀の外へ立出て急かに四方を窺がへど阿處を指て逃失しか更に姿も見ゆるより爰に尋ぬる道も絶りて父は遺恨の拳を握り唯その油断を悔るのみ去とて捨置がたければ急よ本陣の主個を招き即刻村役人よ觸示して密々穿窬を途させたれど昔呉手がりありされば父は彌々途方よ暮れしかかて加へて其夜より深創を負し若黨は手當の効もあらずして翌も待て非業よ死し重ねの災難よ其若黨の死體を伴同驛の寺院へ葬ふり父の情々大和田より佐倉の方へ往すして江戸の邸第へ歸り來り殿へ謝罪の遺書認めめ腹搔切て果敢なき御最期その事上へ聞えし故以ての外のお尤めありて家祿の元より邸まで追放されし口惜さ其前私が母人も父が最期

よ後れじとての私へ後々の事を示し是も其場で自害しよれば便りなき身の心細く七々日を濟せし後邸第を出んとせし時よ重役よりの口達よの鼻よ左内が奪去られし防門信國の短刀を探しいでして差上なバ夫を功よ殿へななき歸參の願ひいよし呉んと仁愛厚き内命あり尤とも父の遺書よも其事細々認めぬわれば旁々以て心を勵まし夫より諸國の市町を五年が間歴巡りて尋ね探れど却々不明終よ再回二十の年東海道より江戸へ戻り喧嘩が不思議の縁を引き此家の先代政五郎よ引よてられよ其後よ私を娘へ娶して跡を譲ッよ人入業恩と情の二筋よ足を止めよ此年月忍ひよ信國の詮議のすれど未だよ知れず養父も女房も此世を去よ夫よりの像身と思ふ娘のお露それよ繋がる伴三も見よどるありとかもふも今此大事を打あてて兩個よよのむ短刀の穿鑿わが亡後よて見あよらば早々堀田家へ持參なし祖父が過失此身の科を兩入よて償のひくれ

よ其時ころの堪當ゆるし元の親子よ親分子分時宜よ因よら堀田家へ歸參をなして室内の家名を繼とも苦しくいよトどうを傳へて下さりませ唯残念な政五郎父の遺言母の訓示も今日が今まで果さずして此まよ病病よ仆れるとは如何なる前世の報ひよと云も苦しき息づのひ病苦を押よての長物語りよいよく疲れて臥悩むを見るよお露も伴三も泪ながらよ轉び出おもひすツツと壁立るをかさとい急よ袖をひよへけれやしお露さん泣て居る處ぢやないア、如何しよらよのらうなア

第十八の紀念の分配

實よや生老病死苦と佛氏も既よ説れし如く肉體假の世よ出て七情四苦の塵界よさまよひ一心五慾の使役よ遇も北邙一片の烟よ化せバ所謂十方空よ歸して魂魄豫彌の淨境よ遊び始めて真如の觀を得べし借も政五郎の年來心よのりよる親の遺望を其娘よ物語りて

其後の急いそうよ心こころ緩ゆるみし故ゆゑの痛いたく病びやう癩いの募もつり來きて終つひに還かへらぬ旅たびへ赴むかひ
 呼よびと叫こゑべど玉たまの緒いとの絶たてり繫つぐ由よしもあらぬ峰たかねの松まつとおさと
 が内うち々々に謀はかし合あせ急いそよお露つゆと伴ばん三さんを呼よびまねきし体ていよなし子こ分ぶんの
 者ものを八は方ほうの知し音ねの方かたへ走はせせて厚あつく菩ぼ提だい寺じへ送まうし追つ善ぜん供く養やうも念ねん
 頃ころよ登のぼり終まりし其その後のちの日ひ數かずの過たぎ此この家の跡あとを續つぐべき人ひともなけ
 れバ皆みな一同いっとうに立たち會あひ家か財ざい諸しよ道だう具ぐを賣うり拂はらひ數かず多たの子こ分ぶんへ配はい當たうし又また峰
 の松まつおさと等らが辭こと退たいするへも紀き念ねんよ贈くわり其そのあまれるを貸かひ來きて伴
 三さんお露つゆは佗たしくも久ひさ右みぎ衛ゑい門もん町ちやうの裏うら店やに住すまひ二に月げつ三さん月げつ送くわる中なかお露
 はあゝる臨りん月げつよ安あん産さんしよは男おとこの子こ其その初はつ聲こゑも勇いそましく母はは子こ少すくしの障さや
 りもなけれバ伴ばん三さんいたく打うよろこび當たう坐ざは貧ひん苦くも忘われし如ごとく肥ひ立たち
 を待まちて其その子こをハ政せい吉きちと名なけしは那かのの政せい五ご郎らうが初はつ孫まごとて其その名なの頭かぶ字じ
 を用もちひしなるべしさきさまの峰たかねの松まつ大だい次じ郎らうのお露つゆが太たい恩いんを忘わせやら
 ら親おや分ぶん政せい五ご郎らうよわられしよりの常つねよ久ひさ右みぎ衛ゑい門もん町ちやうへ尋たずねさしり何なにの

と深しん切せつよ心こころを添そへ折を々々金きん錢せんをも贈くわれるゆゑ兩ふた個こも大おほいよ力ちからよおも
 ひ厚あつく交まはり居ゐたりしが頃ころ日ひ峰たかねの松まつの師し匠しやう不知しらず火ひ光くわう右みぎ衛ゑい門もんよ連つら
 れて奥おく州しゆ筋すぢへ往ゆされバ絶たて久ひさしく音ね信しんもなく女おんな髮かみ結むすおさとのみ廣ひろ
 く見み舞まてくるれども重かさねくの世よ話わになれバ早はや此こゝ上うへのと得うもいは
 ず夫ちゆう婦ふは有あり日ひ額ひたいをわつめ長ちやう大だい息いきつくく尋し思おんの折をから八はち杯はい機き嫌けん
 の破や落らく戸こがこゝだくと千ち鳥とり足あし傍はら若わ無な人ひとよのさり込こみチイく其その
 處ところを伴ばん三さん哥か々々愚ぐ圖と辰たつさんが御ご出いなすツ一杯いっぱいのましてくんませい
 なチ、其その處ところに居ゐるのは伴ばん大だい哥かが連つ出だし親おや分ぶん處ところのお露つゆさんだチ、
 お露つゆさんだくモシおつゆさんへコノ愚ぐ圖と辰たつをおわすれなさりや
 ア爲なすめへチ

第十九は愚圖辰が八杯機嫌

コレサく伴ばん三さん哥か々々何なにも其その機き嫌けんな顔かほを爲なさなくツても宜いぢやアぬ
 への素もとはトイハバ明あ神かみで一いっッ鍋なべの生なま臭くさ朋友ともおぬしが始はめて親おや分ぶんよ

救ひれて来た其日から不長ことは愚圖辰が皆な敵味で遣たちやね
 へか爾して見ればおぬしよのお師匠番の此愚圖辰ナニモ其様も鹿
 爪らしく思考て居ねへでも晴昔の情誼もたつた五合お師匠番も奢
 ッてくんねへろれとも夫か面倒なら其飲代も幾千でも貸てせへ呉
 なさりやア愚圖辰さまの御勝手次第片足あて又一杯決して手數
 はかけねへからト舌も回らぬ愚圖理込よ伴三は心の中困つた奴と
 いかもへども是も同じく親分よ使ひれて居た朋友とおもへども我
 身を顧みて其罪科も恐ろしく且は合壁近家へ對し若親分の名を聞
 れ死後の恥辱よなることあらば佛へ對して云譯なしとおもへば面
 を和らげて愚圖辰の側へ寄りチイ〜辰さん最わかつたから靜か
 よ爲ねへ折角おめへがたづねて来たから自家で一杯飲ていがおめ
 へも知て居られるだらうが髮頭親分が死なせてから子分手合も四
 離八散何處よ如何して居るおとやら夫よ親分の家さへも他手よ波

つた哀れな始末ろんなあんなを考へると近隣合壁へ聞えても死だ
 親分へ濟ねへから今日はおめへよ飲代をくれろと云ならおげやう
 程よ是かとおめへも身を堅めアレ見や那は明神の政五郎の子分
 有たが有繋親分が良つた丈立派な者よ成をツたト云さる様よ成た
 なら艸葉の蔭で親分が如何様よ悦ぶことであらうト其味の異見
 よ愚圖辰も始めの勢ほひの處へやら頭首を垂れて眞面目よなりい
 かよる是は悪かつた伴三大哥もお露さんもどうぞ勘辨しておくん
 なせへ私は性質飲酒が瑣瑣で明神の親分よの世話も成た揚句の果
 すまねへ始末を做出來して夫なりけり又隨徳寺此頃聞ハ親分が六
 宇がへつた其跡ハ他人の者よ成たと聞備ハ大哥もお露さんも不義
 心で居なさるかと思んで居たは私が過失今の大哥の言葉を聞き醉
 た酒まで醒て仕舞たトおいとま倉皇よ立出る路次へ酒屋の御
 用樽を片手よすれちがへば愚圖辰の獨り言エ、また虫を起らしや

アがる

第二十八の裏借家の歎言

跡よお露と伴三は顔見合せてかこち言おるひ回せば回す程世よ形
 ない男女が身の上曇頃親分か死なれた時直も江戸を立去て草を
 分ても信國の刀の詮議を做出さんどおもふも任せぬ和女の出産そ
 れらこれやよ月日を送り今日が日までは過したるもの、早たくいへ
 の金銭の消費のたして貧窶手元さり迎大事を抱へた身いつ迄爰よ
 住でも居られず殊も親分の顔もあをばまんざら襦袢もさげられず
 今も今とて愚圖辰がねたりよ來ても親分の顔をおもへばアノ様よ
 濡ッて歸るを見るよ付け最半日も此處よ居るは無益の汰沙なれば
 少しなりとも家財を賣り一旦此家を立退て和女と粹政吉は上州前
 橋の親戚へあづけ先一二年の身一ツで諸國を詮議よあるかうと思
 ふはいかよと問かくればあつゆも險しバたゝきなるほどるれば宜

かんがへ妾も根岸を出た時よ直も他國へ欠落と決心しては居まし
 たが獨りの親父が案じられ夫よ腰妊の身もゑ今日まで江戸よは居
 たもの、最父さんもお目出度成て盡了此子も安々産おとせば何處
 へもかうと勝手次第ホンニおまへの云れる通り此江戸よ居る中は
 那して以前の子分達が尋ねて來まいものでもなし夫より寧そ他國
 へ往けば如何な賤しい稼業をしても人の指さす譯もなし妾もろき
 が望みトの言葉を聞て伴三がろれでは今宵一夜を過し明日は早々
 仕度を整のへ家財を残りず賣代なし夫を路用よ出立しやうと語る
 を夢よをさな兒が乳房をたづね難たるよや大聲上てオギャア／＼
 附てまうす此伴三といへるは素水戸家の浪人吉水伴左衛門と云
 る者の倅なるが壯年の血氣女色よ溺れ父伴左衛門が貯はへの金
 を奪ふて放蕩よ散じ盡し終も父の義絶を受て後四方よ漂流せし
 が一夜吉原廓内よて破落戸黨よ喧嘩を買を不慮の難義よ遭ひ居

たるを露が父明神の政五郎も援けられたる義侠も感じ乞ふて
政五郎が子分とありし其頼末と素姓とを未だ記すも違なけれバ
筆の序より其大畧を爰も掲ぐ看官よろしく諒せらるよ

第廿一は成田驛の旅籠屋

夫れ天地の萬物の逆旅にして光陰は百代の過客なりとか春と秋と
の花紅葉箱嶺八里の馬追唄も往來よぎはふ成田驛正五九月は取分
て成田山への参詣も織が如きの繁昌の保養八分の江戸講中皆身ま
しく定宿も月雪花の華美ぞろひ孰も劣らぬ大陽氣の中に一ト際高
等なは海老屋といへる逆旅の奥の一ト間の二人連一個は年紀三十
前後人品もよき町人体今一人は年齢四十二三にも成ぬべく是は附
添ふ供なるべし頃しも九月の中旬よて夕暮よりの冷々と秋風寒く
肌をさそへバまだ宵なから主従は臥床を敷せ枕も既き世間バなし
を夜伽として眠るともなく熟睡せし容子を驚くと窺ふて供の男の

密と起出でて行燈の火を早くも吹き消し探り求めて取出せし布團の
下なる主人の胴巻たしかま是とあしいたいき振足さし足障子の外
へ出逢頭に一個の男互ひに顔を差のぞき善六さんか五郎殿か爾し
て首尾の上出来くろを此通り掠奪て來たから先此金ハそなたへ
預け此胴巻ハト耳に口爾して盡了ば大丈夫と黙頭合て右ひだり分
袂し跡ハ眞の闇知る者たはて無りけり斯て其夜もいつしかに東天
光の鶏の音に明をバ四方の逆旅よりおもひくくに立出る駕丁が被
聲馬の鈴耳かしましきも一仕切此方にハ又主従二個額あつめて思
案顔折から茲へ當家の主個おそるく立出て是ハ若旦那さま毎度
御愛顧も預かりまして有難うぞんじまする諸今朝ハ胴巻の御
紛失と承まはり通り一遍の御客さまとも違ひ大切なる貴公さまの
事容易あらざる次第とぞんじ番頭善六さまの御内談もござります
をバ嚴しく家内を取調べました處いかよも善六さまのお察し通り

今朝ほど此座敷へも掃除も出しました女中めが杖の中は是の通りお胴巻文はおざりまいたが肝腎の金子の處いかほど糺しましても一向よ知らぬぞんせぬとばかり申しまして何處へこかしましたやら未だ白狀の仕つりませぬと若も斯云事が世間さまへ洩らしては家の暖簾も拘りりますまば何卒金子の義の私しへ辨じ方を仰せ付らる吳々其内分願ひたうぞんじます

第廿二の赤萩村の浪宅

我宿の道もなきまで荒れけりつなき人を待とせし見る影もなき寝蓆まゝ家主の吉水伴左衛門とて六十路よ近き老の坂本の水戸家の武士なりしが何か其身よ譯ありて下総の國垣生郡赤萩村へ移り來て世よ捨らるし貧苦の暮し昔時おぼえし武藝さへ今の早稲田の案山子も劣る其身の糊口よ漸やく近處の小兒等へ手習ひ杯をしへ授け愛年月を送り來て今日も短かき秋の日の早暮ちかく鳴る

鐘よいと哀れを催はし來り伴左衛門の圍爐裏の側よ脱あまぬいて行末と越方とを案じ遣り誑茶のみつゝ獨り言落葉をさそふ秋の風入相つぐる山寺の鐘の音よさへ驚かれ明日をも待ぬ老の身の此世よ名残のあらぬども前年家出をなせし悴いまの何處よ居る事やら片羽の子ほど可愛さの八しほ増すと世の諺言情願生命のある中よ逢て還言も做て置たし夫よ引かへ娘のおうめ此親爺めを畔のッて少しなりとも活計の補欠と可愛や旅人宿の炊烟奉公折々家へ尋ねて來て孝養つくす健氣な心術世が世であらば郎ありて中間下部を使ふ身が一夜泊りの旅人の配繕給仕まつかへる果敢なき業を爲すものも皆此父の心得ちがひゆるして吳と身を賣て賤よ合む露の玉小草ふと分け戸口より入來る一人の男小膝屈めて内よ案内し吉見伴左衛門さま御在宅でおざりますかど云れて急よ容姿をあらため顔打見やりて懇懃よこれいゝ誰何かとぞんじたら海

老屋の御主人どうしてかゝる茅舎へ御出下されしか汚穢しくども
 マツく是へと上座を譲りて會釋なし借々私し方からハ何時なが
 ら御無音のみ平に御用捨を願ひまする不東ある娘のお梅永々御世
 話に預かりまして千萬恭けなく仕合定めて不調法ばかりいたし切
 夕御厄介なことでござりませうト云つゝ表の方を見やり表に離や
 ら人形あるはお供の衆でござりますか何故此方へはおいり成ら
 ぬサア誰何か此方へと云つゝ起て見かはす顔これはまア如何した
 もんだ誰かとおもへば娘のお梅お供をして來たならば何故に自家
 へは入らぬぞ

第廿三はおうめが濡衣

おはれや吉水伴左衛門の娘おうめが憶りなく身に濡衣を着せられ
 て干すゝへをなき物おもひ海老屋の主個よつれられて赤萩村の父
 の家へ漸やう來ことは來たものゝ心にもあき盗人の汚名を仇に負

せられ其身ばかりか父へまで愛を聞する形きなさ如何せばやど取
 つ措つ日ごろ戀しと慕ふたる我家此闕こに兼ねて雲時軒端にたゝ
 ずみしが父の夫ども夢にも知らず娘の顔を見るよりも何ゆゑ家裡
 へ入らぬと叱る身よりも叱らるゝおうめは胸も張裂くばかり唯々
 とはいへど入りぬて唯さめくゝと泣居るを海老屋の主人も推しや
 り暫時の物も得いはで居たるが斯ては事もはてまじと氣を固まし
 て坐を正し伴左衛門に打むかひ借私くしがあがりましたは何とも
 貴公にやにくいおうめどのゝ身の過誤決して爾云ふとはないど私
 し始め家内のものも豫てぞんじて居りますれど何を云にも客人
 から指て云れた其身の不運ト半分聞て伴左衛門は小膝をすゝめ顔
 色變へ借は娘のおうめには何ぞ旅客の品物でもト焦燥のゝるを押
 しづめ唯爾ばかりすしても容子のあはかりなさるまい其仔細は私
 くしより今一ト通りやし上ん實は二三日以前より私し方の奥座敷

へ御止宿さされしお客様江戶本町の藥種問屋玉城屋の若主人芳
 次郎さまと仰しやるお方其お供に同家の番頭善六どのとすすも
 の正五九月の御定宿いつも餘所へはあどまりあさらず今度も新勝
 寺へ御參詣に御滞留なされしが今朝ほど發足の際になり若主人の
 胸巻が昨夜紛失したとの騒ぎ其金高も百圓と聞て驚ろく其中に番
 頭どのの云るには何でも爰へ給仕に來た女中が如何やら怪しい
 と指ざされては打棄あかれず何にも知らで働らき居るおうめどの
 を帳場へ呼び取調べて見ました處豈圖らんや紛失した其胸巻まきが
 袂から出たのに一同うち驚ろき當の目と目を見合すのみ私じ始
 め當人まで壓氣よ取れて居りましたか去とて証據の出たる上は客
 人へ濟ざる次第と其百圓は私くしより辨金あしての盡了しもの
 全く盗んだ愚漢の出ぬ間の誰彼まておうめどののみ疑がひます
 ればどうぞ盗人の出まするまで御迷惑でもおうめどのをお預かり
 置下さりませ

置下さりませ

第廿四は親娘が悲歎

伴左衛門の熟々と海老屋の主個が言葉を開き不慮の事變の湧いで
 しよ殆く當惑あしたりしが何時に變らぬ深切を感もへば最ど其身
 と愧ぢ長大息を吐て答ふる様驚ろき入たる娘の不始末たどへ淵衣
 あればとて証據あければ雪冤はたはず去とてもまた辱けなき貸殿
 の御厚意お家の瑕穢とあぼしめし數ならぬ娘をば大金にかへお救
 ひ下され事穩便にお濟せありし親娘が爲の大恩人冥加の程も恐
 ろしと深く謝すれば海老屋の主人チノマア其御心配に及びま
 せう唯今もやす通り其百兩の盜賊もたしかに夫と丁りは爲たれど
 証據なければ表むき指もさされぬ口惜さ殊に定宿の御客人に御迷
 惑を懸てはトおもへば夫や是やを察しお取替はすしたのもの先方
 は有名の藥種問屋江戶へさへ歸られたら返金されるの知れて居れ

ば何にも御遠慮さされませすあト云つゝ側のおうめに對ひ今親御さ
 まへお咄しを致した通り全たくおまへの所業でないは私にも能く
 知ては居れど其盗人の詮議も出来ぬば當分の中親御の側で孝行を
 お盡しなされ又ろの中に女房でも此方へ迎ひによこしませう必ら
 ずどもに何事も案じ過志をせぬやうにト慈悲の詞のよし置き伴左
 衛門に會釋して我家を授てぞ歸りける跡見おくりて伴左衛門娘お
 うめを近く招き災難おどりの云ながらかゝる冤狂をうくるとは畢
 竟そあたが足ぬから假令ありの立にもせよ先さし當つて百兩
 の金を此まゝ棄ても置れず去とて今日の此身の上海老屋へ返金し
 たいにも大枚百兩といふ才覺か出来やう道理もあい當感飛だあと
 を爲てくれたト恨み歎てる父が胸中おうめ深く察しやり謝る言
 葉も泣く泪袖かみしむる四苦八苦腸を斷つ後悔の遺漸なき身に何
 事が尋思を決めて氣を取直し御主人さまへ大切な事をおいなしす

のを悉皆忘れて居りました未だ遠くへはお出でなさるまいドレ一
 ト走り追蒐けておはなしやして参りますると急かに家を駈いだす
 折から降出す秋雨の落葉の上へサラ〜〜〜
 第廿五は五郎三が勾引
 おうめは何と云ばぬに岩に堰るゝ泪川ながれの淵に沈むとも身に
 被せられし濡衣を疾く脱すてゝ親人の疑念を晴せし其上に難義を
 かけし主人へも金償なはい如何ばかり心涼しきおとならんと獨り
 尋思を定めつゝ海老屋の主人へ云残せし大切ある用事ありと急か
 ん父へ言おきて聞き雨夜の田舎道を七八丁たどり往き吻と一ト息
 き路の邊に立どまりての獨り言ホンニおもへば妾しほど世にも
 因果おもものはない力どたのむ母上には幼さい時に死わかれ末を委
 頼の兄さんは家を出たまゝ音信不通たつた一人の父さんへ孝行を
 盡し度と奉公に出た甲斐もなく却つて足ぬ心より安心させやう

ともふて居た父さんへまで苦勞を掛け夫のみならず此まゝに若
 し盗人の出ぬときは他人にまでも指さしれおうめは老海屋に奉公
 中旅客の金を盗んだといつが何日まで盗人の汚名を晴す時なく
 恩愛あつき父さんへ不孝ばかりか慈悲深き御主人へさへ云譯あし
 夫より寧ろ何處へなり此身を賣て金どのへ無實を負ひし名を雪
 ぎ一ト日も早く父さんへ安心させうと心には覺悟きはめて是まで
 は漸々出さぬ來たあれど苦海とやら遊女とやらよ身を沈めるには
 誰方へ往ば世話して呉やうか噂ふ聞は船橋に遊女屋が澤山ある
 と何時も海老屋で旅客の話し外に知己もあらざれば是より獨り船
 橋まで夜道を懸て急ぎ往きたとへ見識ぬ家にて一伍一什と打
 けてたのまば聞て呉るであらう爾ぢや〜と褌取あひ懸き夜風の
 吹きさそひつよく時雨の降そ〜をさうめは少しも厭は〜ころ本
 街道の方にむかひ急ぎて走る後ろより顯はれ出たる一人の男類冠

りせし手拭をはうしてあうめは壁をかけ〜其處なうめさ
 ん幾千要のか知らないが其金私が貸てあかうマア急がずとも待た
 がよいといはれてお梅は打驚るき後見返りて悔々に爾してあなた
 は誰何様と近寄る男の面影を闇にすう〜て懸々見やりや、あなた
 は海老屋のお客人たしかに御名は五郎三さまト問れて男はうち腹
 頭いかにも私は五郎三だ

第廿六は唐歌が苦海の勤

實は虚の皮虚は實の骨まよへば虚もまると〜あり悟れば實も虚と
 なる虚と實の仲の町まよふもよし原悟るも吉原とは昔しの人の遊
 女の簀泣てうれしき夜は稀に笑ふてつらき苦界のつとめ昨夕の筑
 紫の殿を迎へ今朝は京都の客を送る襦袢の袖の移り香を慕ふて通
 ふ衣紋坂往さ來るさの標治郎にかはす情の仇むすび一雙の玉手千
 人の枕半點の朱唇萬客尊と詠じたりけん唐歌が坐敷は最もしめや

かに鴛鴦の番ひの春の海夢あたしかき屏風の裡戀にやつれし唐歌
 が惱まし氣なる面色して長大息つく〜男郎に對ひおもひまひせ
 は回す程世に惨きない妾しが身の上今もお話しやす通り五年以前
 の秋の末不圖曲漢に勾引さき此よし原へ賣れてより乾く間もなき
 袖の露赤萩村の父さんも妾しの事と二ツに海老屋へ向る顔なし
 とて其年田舎を立退て何處へお出さされしやら心行方さへも定か
 ならず又兄さんも其通り今日が日まで音信のないは若し死亡りで
 も爲のせぬかど朝夕に案じられ苦勞のためゆる日ハなけれど去年の
 秋の燈籠にたま〜貴郎に御たにかゝり恥かしいやら嬉しいやら
 田舎ろだちの足ぬぬ妾し所詮およばぬこすながら今では貴郎を杖
 柱外またよりもあい身の上どうぞふびんど思召し力よ成て下さん
 セト忍び泪のかこち言郎は聞て目をしばた〜きあるほど和女の云
 をほり數へて見れば五年跡成田山へ參詣し海老屋へ泊つた其夜さ

り路用の金を盗まれて殆く當惑せし處老海屋の主人が債のひ呉れ
 我身は無事よ歸りしが其時如何なる譯なりしか和女の袂へ胴巻が
 入て有たと云ふとにて其夜の罪を被せられまど聞たばかりに其
 は知らざりしに去年の秋の燈籠に不圖此家へ連れられて初會に嫌た
 和女の顔見れども心つかざりしが仔細をきくば此里へ賣きて來た
 も其元は全たく我身の誤まりから夫をおもへばどう有ても和女を
 爰へは置れぬ道理早う手元の都合をして屹度身うけをする程よ今
 しばしの間辛抱して我身のたよりを待てたもと女の脊を撫さすり
 慰さめられて唐歌は最もうれし氣に男の顔見やる險の愛嬌の露も
 つ庭の海棠も是にはいかで及ぶべき記者まうす文中の男女何者あ
 るか大方の御推もじ)

よし原へこれも賣れて雨風の苦界はなれぬ花のさくら木却説前回
 第廿七は番頭が苦肉の計

に顯あらわしたる唐歌かたがといへる遊女あそびの敢あて爰こゝに明あさずとも讀よ者もの推おした
まひつらんが眞まことは彼の赤萩村あかの浪士なみのし吉水きちみづ伴左衛門ばんざゑもんが娘むすめなり抑おさ々々吉
水の娘むすめおうめは如何いかして此吉原このよしはらに居ゐるぞといにふ先年せんねんおうめは海
老屋らうやにて盗人ぬすびとの汚名けがれなを被おせられ其悔そのくしさに或家あるけを立ち出いて身を川
竹たけへ沈しづめても金圓調かねだまのへて償たがいはんと心こゝろにおもふ一筋ひとすぢに夜道よみちを逃
り往まんどせし時とき恐おそい事ことには振目ふるめのなき小鳥こどりの五郎三ごろうさんといふ曲まが漢ま
欺あざむき賺あざされ其まゝ江戸えどへ連つかへられて終つひに甘々あま新吉原あたら江戸町一
丁目ちやうめの尾張屋おわぢや彦太郎ひこたろう方かたへ買かれ名なを唐歌かたがと呼よるなり左ひだりれば又唐歌または
今朝けさしもおもふ其人そのひとを歸かへせし跡あとは氣きも折まて其まゝ臥床ふしどに入いたるが
正午ただよひおるまで夢ゆめみつゝ起ある得えやらず居ゐたりし處ところへ青衣あゐの小蝶こてんが揺
さましモツおいらんエ鳥渡目とりわたを覺おぼしなましましアノ仲なつの町の増見屋まか
ら本町ほんまちの番頭ばんとうさんがお在ありなすつて是非せひおいらんにお目めにかゝりた
いとのこと何日なにひにもお出いなすつた事ことのない番頭ばんとうさん若わかや若旦那わかだんなの

お身みの上うへかかも知しれませねば此方こゝへお呼よべしんせうかト聞きては心こゝろも
心こゝろならず兼かて不よ良しい番頭ばんとうと若旦那わかだんなより瞬まもあり惚おぼ々々こゝへ逢あひに來き
たとは定めし嬉うれしい事ことではあるまい去いとて逢あひに歸かへしては猶なほ更さら心こゝろ
も濟よぬ譯わけ察さるのことに逢あひ上う様さま子を聞きたら分わるであらうと思し案あんを
さだめて小蝶こてんにおかひ何なんの用もちか知りせんが定さめて若旦那わかだんなの事こと
であらうと思しひんすからお呼よべしんせうかト云いつゝ廻まて身みを
起たし座敷ざしきの掃除そうじすむ間まも其身そのみも漸し々々化粧けしやうを了しまり待間程まちまなく入いきた
るは本町ほんまちの藥種問屋くすりぐし玉城屋たまぎやの番頭ばんとうにて善六ぜんろくと云い曲まがけ者もの茶屋ちやの女中にや
よ送おくられて先唐歌せんかたがの座敷ざしきへ通り青衣あゐか運はぶ茶烟ちや盆ぼんを前まへへ扣ひへて
悠ゆる然ぜんと烟たば州しゅうくゆらし居ゐる處ところへ隔へだての紙門しもんおしひらき唐歌かたがは進すすみ出い
であるはマアあなたに能あたるおいて下くださへましたト會釋かいしやくをすれ
ば番頭ばんとうもハイ是こゝれはくおいらんでござりましたり初はじめてお目めに
かゝりますす借か々々毎まい度どく若旦那わかだんながあがりまして色々いろくとお世話せわさま

に相成ます、互ひに寒暑の口誼も了り四下の人も座敷を避けて廊下へ出し容子を見て番頭は膝をすゝめ今日態々あがりましたは外の事でもござりませぬが、あいらんへ一ツのお願ひアノ敷あらぬ妾し風情へお願みとはエどうぞ若旦那を昨夕限り爰へ招でくださるなエ、

第廿八は前回の餘談

聞て驚ろく唐歌を番頭は押領めサア其驚ろきは道理なれど是よは種々仔細のある事だアあいらん氣を沈めて驚くり聞ておくんなさい斯様ことを云つたから譯のよからぬ番頭だとお察しも有ませうが此頃自家の若旦那が三日に揚々ぬ廓かよひ少しも醫の沈着ぬのに此番頭も氣をもんで根岸におざる御隠居へは坐なりを作つて口へも出さず包み隠して置た處昨夕根岸の御隠居から私しに來いと急な使ひ何事かと往て見れば誰が話しやしたやら若旦那の不

行跡を一、ならべ立ての御叱り五年跡がら本店を任せて置た芳次郎が爾云始末をすると云も畢竟店を支配する番頭の不念もあり旁々以て芳次郎は一日も自家へ置けぬ今日かぎり勘當するト以ての外御立腹また其方も同罪なれどいづれ帳合の調へもあれば其上に沙汰する間身を謹んで居るやうにと私しまてへ殿しいお叱言いかほどお賠詫申しても日頃勝氣な御氣實ゆる言出した事一寸ても後へは退ぬ老の一徹今日バ定れし本店へ帳合調へに出てあらうと思ふに付ての一ツの心配日外他家から預かつた防門信國とやら短刀は其御隠居へも問合せて大枚百兩貸た品物其短刀を若旦那か内々店から持出してまた百兩の質に入れ今本店にありませぬば此分疏も立がたし夫や是やの譯あれば無理きたのみに出た番頭あるの道理を聞わけて若若旦那の爲どおもはば屹度此のち呼ぶまいと私しまでへの書附をどうぞ渡して下さいト退引あらぬ義理

詰に唐歌は身も世もあられず唯泣き伏て言葉もなく細囁しむる悲しき愛さ番頭は側よりモシあいらん何もこれが死にわかれでもするではなし切ると云もホンの常坐其書附をお貰ひすも夫を規摸よ御隠居へ御勘當のおわびを入れ直に元々通りにして此方の首尾は私しから内々付ておげます程に決してお案じあさいますなといはれて漸々唐歌も少しは安堵のおもひを爲し泪はらうて頭を掻き斯云ふ始末に成たのも皆な妾が科されれば其おたのみは聞分ました廊下にひいく草履の音は誰夢路にや通ひけん寂寥とせし大びけ過ぎ遠くきこゆる紙粘ちかき音に鳴く茶立虫問毎くは種々よて痴話に雁りを破るもあり眠て背を合するあるべし機會あそ好けれと唐歌の裏の跳橋忍び越え日本堤へやうくと聞きたよりに通出し吻と一ト息ふりかへり若しや追人の來はせぬかと親がふ彼方の二

第廿九の上方唄の夢

階座敷は上方唄の聲やさしく夢のうき世か浮世のゆめか花も紅葉も一盛りと謠ふを聞て唐歌は思はず耳をろばふて今のはたしか上方唄の夢とやら云二上りものいつぞや若旦那が教へてやると云しやんしたを思ひ出して迷ひの種ほんに浮世は假の夢花も紅葉も一盛りとは能つくつたものぢやなアと云つて懸て一筋の人目づとみを辿りゆく袖と袖とのすれ違ひ其處へゆくのは唐歌ていのか爾云あゑは若旦那どうして爰へと取すがれば此夜ふけに廊を脱けそなたは何處へ行きやる此ぢやアそれから聞ませうト云れて唐歌胸せまり何處へとはお情ない妾しあなたに逢れぬ故今宵廊をぬけ出し吾妻橋から身を投て死ぬる覺悟でおささんすわいなさていりなたも死ぬ覺悟か我身も親父に勘當うけ今身置を處もなければ寧そ死んだが勝であらうと覺悟は爲ても目の先にうさたの姿が散ついておもひ切れぬ身の因果せめて此世の名残にと夜

ふけを待て此土提まで迷ひまよつて來る處ろてうどおめにかゝる
 と云も互ひに離れぬ約束おとあれも前世の宿縁か何れ鬼もあれ斯
 して居て見どがめられての恥の恥はやう追人のかゝらぬ中山谷堀
 から河岸づたひ吾妻橋が死どある早うくど手に手を取り往んど
 したる向ふより提灯照して番頭善六遣手のお爪も蚤取眼それと見
 るより兩人が逃出すを引もどし欠落者の唐歌は此お爪が見つけま
 したと云ば番頭善六がろの唐歌の此とやらは此善六が捉まへたト
 右と左りへ手どめのかなしき折から爰へ青衣の小蝶おいらんエ々
 々何ぞ夢でも見なんしたかエ大さう隠されて居なさんしたヲ、お
 まへは小蝶そんなら今の夢かいなア

第三十は五郎三善六等の捕縛

こゝに有一日の事ありしが本町の藥種問屋玉城屋の店頭へ若燕仲
 間引連れて入來りし一個の武士横柄に案内する様拙者は小石川なる



水戸邸内に住居する金丸藤十郎とヤササの當家の主人芳次郎とは豫て別戀にいたす者今日は主人へ用事ありて態々推参いたしたりと云を番頭聞付て店頭へ進み出これは〜金丸さまでムりましたか其處は端近卒先きたへお通り下され借折角御たづねの主人芳次郎儀は種々不都合の次第ありて先頃隠居より勘當うけ今は當家に居りませぬバ若止を得ぬ御用にもいへば此番頭善六へ仰せ聞られ下さりませと頭を下て陳るを聞き金丸は言葉をあらためナニ主人芳次郎は勘當うけて當家には居らぬと然らば隠居に對面いたさん案内たのむと坐を立ち直ちに奥へ入きたるを見るより隠居芳右衛門恭々敷立迎へ唯今是に承たまはれば何か悻へ御用の趣むき如何なる次第におさりまするかト言葉も了らぬ其の中に金丸の膝立直し借は其方が當家の隠居芳次郎の父なるか今日拙者推参せしは先頃芳次郎が参られて急場に金子の入用あるゆゑ防門信國の



短刀を暫時あづけ置く間百兩用達くれる様と折入ての頼みよ付き
 豫て懇意の間柄難義とあるを見棄もされず其日百兩用達しに其後
 は絶て音信なく早返濟の期日さへ過れど今も沙汰なければ今日は
 態々其事を尋ねがてらに参りしが音信なきも道理にあら勘當とわ
 るならバ索より不用の短刀ならん拙者方にも入用なければ一應貴
 殿へお答へやし賣拂ふより外はあし用事と云ひ是までなりと云放
 ヲて起あがるを隠居は急よ押とめ金丸さまとやら暫時お待下さ
 りませ其百兩の私くしから唯今返納いたしますれば何をぞ右の短
 刀は此方へあもどし下さりませといひれて再回坐よ直りいかさま
 其處に氣が付なんだソレは最金子さへ手よ戻れば信國の短刀は則
 はち是へ持参いたした卒その金子と引換に此短刀を受取れよト差
 いたしたる袋の裡此方ハ小判の百兩包互ひに中身を改ためて受と
 さめんどせし折から何處よ忍び居たりけん六七人の捕拿は破亂々

々ど顯われ出で矢庭に金丸を捕てあさへ猶若問仲黨をも搦め捕り
 次いて番頭善六へも細うち懸け引立んとするを見て隠居ハ驚ろき
 はしり出で捕手の頭人へ伺ふに頭人此方へ打むかひ是なる金丸藤
 十郎とは本名ならず實は小鳥の五郎三とて身に兎状ある曲流なり
 前年神田明神下なる人入渡世政五郎方に於て二百兩を欺むき取り
 其後下總成田驛にて當家の主人芳次郎が路用の金百兩を奪ひ猶赤
 萩村の浪士吉水伴左衛門の娘おうめを勾引し新吉原へ遊女に賣た
 る罪料露顯し今日引立に向ふより猶また當家の番頭善六も同類な
 りとの訴人あれば搦め捕て同道いたす

第卅一は鎌倉の掛茶屋

源氏中興有頼朝一鵬圖昔日搏二扶搖風雲三世山河壯社稷千秋歲月遙
 鬼暮依城壘哭白揚秋傍三墓田一淵人間盛衰知何物一夢茫茫節燕こゝは
 何處ぞ薪推る鎌倉の町稍盡處古し並樹の松少枝に掛し手業の自在

鍵往來の人の足憩めに農間かせぎの葎茶店店頭には駄菓子草鞋
 など並べ釣下て枯枝を折ては燃す藥罐の下此處の女の近間なる百
 姓の女房らしく小兒背負て煤古し顔ろのまゝに客人へ溢茶すむ
 る質朴は是も旅中の一興あるべし今しも八幡宮の方よりして下り
 來れる二個の旅人容態は孰れも商人らしく爰の茶店へ腰打掛け
 ンくあかさん茶を一ツおくんなさいハイくお客さま御參詣で
 ござりまするかマア能お天氣ておよろしうござりますと溢茶を汲で
 差出す折から又もや爰へ來がしは長谷村に住む屑屋の伴藏荷
 籠おろして入きたりおかみさん今日は大分煖氣て能おさいますと
 云つゝ此方の容に對ひお容さま方鎌倉御見物でござりまするか是
 から江の島へお廻りでの御遊山は又格別でござりまするか是
 れば兩個の客人イヤ屑屋さん儲かりますか何でも最う稼ぐに
 追付く貧乏おしで私達の様にあまけてばかり居ちやア為やうがな

いのサイエ如何いたしまして誠にお羨ましくござります時甚は
 だ失禮お事を窺ひますが貴客方は江戸の方とお見受けしました
 が何邊に御住居で入ッしやいますかニ私達かニ私達は實の處本町
 の藥種屋の手代共さはア左様でムいますか夫てハノ玉城屋さん
 の御近處でござりますかエいかにもおまへの云玉城屋の近處だが
 爾して玉城屋は御ぞんじかエヘイ別にぞんじて居ると云程でもム
 いませんがイヤモ一那玉城屋も氣の毒に飛だ災難に逢なすッてト
 半分聞て屑屋は驚ろきアノ玉城屋の如何なりましたかエ何でも
 人の噂には豫て堀田家で紛失した防門信國とやらの短刀を浪人者
 から預かつた二件で番頭の善六はじめ息子も隠居も番所へ上られ
 御調に成た處預け主の素性も分らず殊に其短刀をいつの間やら
 贖物とすりのへられ今に眞物の行方が知れねば再度紛失させた廉
 で隣れや息子の芳次郎は今に入牢中どの噂なんでも人の取沙汰で

は其折あ上へ召捕れた小鳥の五郎三と云曲漢と番頭善六とが馴合
て仕組だ悪事で其同類の曲漢が眞物の短刀を持って居るが江戸の穿
鑿が殿しいので此地へ高飛したとの話しす

第卅二は鳥居前の占考者

花ふかき跡あはれあり苔の上の花に殘れる雪の下若宮小路の裏借
家に何處よりか來り住けん五十路あまりの一人の浪人其名を乾地
堂泰親と云身すきの爲の賣卜者日々鶴ヶ岡八幡宮の華表前に小か
ある座席を設け身に古さる紋付の黒小袖を着し腰に異様ある
木刀を帶し前には足高き小机やうの臺を置き其上に易經と卦木と
筒に立たる筮竹あり又其側はらに紙旗を立て、當卦本卦吉凶勝敗
方位宅相云々と記したり有恚慮へ向ふより年の頃二十二三とも覺
しき婦人五六歳ばかりなる男の兒の手を引て賣卜者の前へ來り先
生へも願ひ申し度おさります妾ども夫婦の者が年來尋ねて居りま

する品がおさりますすが頃日良人が聞て参りましたのよは如何やら
此鎌倉へ其持主が参つたとも申しますが其品物が手に入ませうや
又其持主の全たく近間に居りませうや情願お占考下さりませと聞
て悉観うち黙頭き癒て筮竹手に取しが婦人に對ひて尋ぬるやう
ア其品は如何なる質ぞ書畫玉石の類なるか又は衣服刀劍の如きも
のかト問れて婦人は包ともされずハイ其品の防門信國とやらの短
刀ト聞て泰観うちおどろき思はず筮を傾ふけて婦人の顔を打口守
り雲時尋思の体なしりが再回思ひかへしけんまた泰然と氣を鎮め
法の如く占考了り卦木を正して云る様いかにも和女の云る通り
其持主は當地にあり去れども事は靜かなるを貴とせば必らず急に
すべからず假令目前に其品ありとも憚らば手に入ること難し自然時
節を待居らば其品終に其手に歸すると易の表に彰るありと云了り
て婦人に對ひ見れば和女は此鎌倉の人ともおもへず襷はづれから

言葉の端々定めて江戸のお方あらんも尋ねやすも異きものなきと
 其短刀を何故に御穿鑿なさるゝやト問れて婦人は稍一ばし答へも
 あさで居たりしが稍有て云るやうお咄しやすも恥かしながら實は
 妾しの親父と云は或諸侯の御家來にて祖父が世にある其折に殿様
 からの御使者の役目と國元へ下る途中お預かりの短刀を曲者に奪
 ひ取られ分疏なさる祖父の切腹其時親父は幼少なから祖父の無念
 を受繼で屋敷を出て唯一人諸處方々を穿鑿したれど終に短刀の見
 當らず祖父の無念も得う晴さで六年前に病死され跡に残るは妾し
 等夫婦どうぞ祖父と親父との積る無念の其短刀草を分ても詮議し
 いたし生の恩をも報じよいと且暮所ッて居りまする

第卅三は鶴ヶ岡の杉林

乾坤堂泰觀の見知らぬ婦人の身の上咄しを一伍一什きゝをはり長
 大息ながらに云る様借もく御夫婦が苦勞艱難我等他人の上にな

へお聞しして感服いたす斯て尋常の失物と大いに異なる處あれ
 ば又占考にも變を生せん卒今一度卦を立て猶その吉凶を卜なひ見
 んト再回筮竹手に取あげ卦の表裏を考がへて熟々易經を打視やり
 コノ御内儀能く聞れよ今また易を判断するに最早其期の近寄たり
 今宵九ツの鐘を相圖に此八幡の社殿を拜し神慮を仰ぎ奉まつらは
 不思議の靈驗うたがひなし疾々此旨夫なる人へ御つたへ候へかし
 ト云れて婦人は飛立つ嬉しさ中の幾干か白紙へ包んで出す謝禮の
 するしあれば有難うぞんじましたと頑是なき子の手を引連れ長谷
 の方へと急ぎ往く跡見おくりて泰觀は何か思案の休なりしが獨り
 黙頭て立あがり笠かぶふけて空打ながめ最早日暮も七ツ下り今日
 は參詣も少なくて終日心を倦しめしが今の婦人の身の上話しに日
 の暮づくとも覺はざりし歸去來まからんかト筮竹卦木筆硯など破
 風呂敷に掻包み標示の旗や小机を左手右手に提さけつゝ雪の下道

踏わけて自が住居へ歸りけり其夜もやがて更けわたり遠く聞ゆる
 七里ヶ濱の磯打浪近く響ける建長寺の報時鐘耳を澄して物凄く空
 さへ何時か霰雲の立捲ふたる眞の闇長谷の方より一個の男鶴ヶ岡
 八幡宮の社内へ來り口を嗽ぎつ手を清めやがて神前へ昇り往て一
 心不亂に祈念なり再回石階を下り來て右の方なる若宮をも拜し了
 り彼の右大將頼朝卿の御墓の方へ往んとして多く立たる杉林を通
 り過んどせし折から何者なるか其前途に徐々歩行ゆくものあり諸
 こそ不審と歩をどいめ立樹の間に透し見れば暖に兩刀を帯したる
 最も怪しき一個の武士深編笠を冠りたるは是ぞ正しく曲漢ならん
 ど心に猜して油断せず其身も用意に挟みたる刃の銷釘を舌もて
 濡らし若し我前途を妨たげなば斫て棄んと覺悟をきへめ足を早め
 て往んとすれば其武士は左右に遮ざり一歩も男を進ませず

第卅四の樹間の月影

立塞がりし武士は笠の裡より後邊を見顧り何者なれば此深夜にこ
 ろら透りを徘徊なすぞ疾く其由を語つて通れ左なくば爰を一すも
 通すと相成ぬト云放つて動かぬば此方の男の勃然と急立ち其云分
 は此方にある黒白なき闇に面部を隠し深更て此處をうるつくから
 へののれ夜盜の類なるべし若し左もなくば汝から先其明証を立て
 見よト云つ刀の鯉口寛ろげ身がまへなして詰寄ば武士は莞爾わ
 らひ如何にも其方の察しの通り我はあれ名ある盜賊天下の貨財を
 寶どおし此下駄の齒で日本の六十餘州を嚙るか樂しみ其方も是が
 羨やましくば我に従がひ手下となり賊を働く心はなきや其方も深
 更に唯獨り此處を徘徊なすからは云ずと知し仇盜兒素人よりは用
 に立ち今我手下となるならば主従三世の誓ひの爲防門信國の短刀
 を其方に與へて証となさんが若者返辭は如何ぞやトい入れて蕪ろ
 く此方の男儲ある能も申したり其信國の短刀を尋ね出さんばッか

りよ此年來の艱難辛苦おのれ大言を吐すともイザ短刃をわたして
 盡了ナニ信國の短刀が欲いのか欲くば與へて遣のす程に今より拙
 者が手下に付かエけがらひしい何で付うぞ付ずの短刀を與へぬぞ
 よ何を小癪な盜賊奴と云より疾く一刀引抜き斬てかれば曲漢も
 同じく一刀ぬきつれて丁々發石と斫結ぶ一上一下虚々實々間に閃
 めく電光の杉の木の間にも隠れて雲時勝負もあらざりしが熱ッて
 斫込む若者の刃の返に曲漢は左りの肩頭斫下られ嗟と叫んで仆る
 を爲すましたりと振かぶり勢ほへ込で又一刀頭上を目標て斫込
 む時曲漢は聲ふりたてめづらしや悴伴三今れ手の内感心せりと云
 つゝ編笠脱すつる折しも空の雲霽て樹の間を照す月わかり互ひに
 顔を見合してヤ、ハ、ハ、ハ、曲漢のみ思ひしは父上さまでござり
 ましたが儲もくど仰天し言葉も出ず茫然さう手負の苦しき息を
 吐きユリヤ悴伴左衛門が今宵の始末無かし不審にももふであら

うが現在父が生の子の刃に懸る因果バナし聞て驚がひ晴されよ(記
 者曰く芝居さらば例の本鉤鐘篠笛入と云凄寥とある)

第卅五は吉水が因果物語

你も豫て知るゝ通り我の元水戸家譜代の武士なりしが身の過失よ
 り流浪の身とあり聊か知音の由縁により下總佐倉の城主なる堀田
 侯の藩中にてト云かけて雲時猶豫ひ其名の夫と明されぬど何某方
 へ身を委ね吃しき月日を消光中有一日主個の何某は密かに我を一
 ト間へ招き今度殿より國元なる御家老への賜物ありて其お使者を
 命ぜられしは豫て恨みを抱き居るお小納戸の室内左内既も明朝出
 立致せば何卒貴殿我に代り途中に於て左内めを無ものにして呉ま
 いかト腹をあかした秘密の頼み不良とよはおもへども善にまれ
 悪にまれ思ある人の内心を聞て背むハ義よあらざ一飯の恵みに百
 年の命を棄るも武士の道ト是非なく主個の頼みを聞入れ即日江戸

の屋敷を立去り下総の國大和田驛へ左内が止宿なすと聞き其處よ
待とも知らずして左内主従三人の同驛なる本陣へ一夜の宿りを定め
たれど我に恨のある者あらねば所て棄るは非道にあらん然とて是
を見通しなば承諾したる言葉に背き武士の本意を失なはんと思へ
ば獨り尋案をめぐらし寧ろ左内を殺さんより殿より那加預づかり
たる其品物を奪ひ取れば左内は役目の失措に依りお小納戸役をゆし
離され猶其罪を被るは必定左すれば頼みし何某の怨恨も消て安穩
ならんと吐裏を決めて其夜さり竊かに本陣へ忍び入り室内左内が
預かり來し那の國家老への賜物を奪ひ去んとせし時に妨たかあせ
し若黨あるより其庭先に所て棄て疾くも其處を立去しが頼まれし
事爲課せぬ以前の家にも歸り難く再回水戸へ立戻り妻ある者ハ
携さへて下總の國植生郡赤萩村へ移り住み問もさく擧げし你と娘
ヤレ嬢しやと云をも待て妻なる者は此世を去り生甲斐もなき此親

父と二人の小兒は無事あれど巖よ役目の落度を被たる室内左内ハ
如何ありしかと朝夕おもはぬ日とてはなく不樂く過る此年月你ハ
家出を倣したるまゝ唯の一回も音信はなく娘おらめは夫より後身
におぼはなき冤罪を被て主人と父への疏分に命をすてしか是もま
た家を出たまゝ生死は知れずかゝる憂苦を身一ツに積重ねたる老
の身の死おくれたる形なき回顧せば今更に責ては我身を仇とせる
室内左内が刃にかゝり死は罪障消滅すべしと借からぬ身を存命て
赤萩村を其儘立去り彼の短刃を携へつゝ再回江戸へ罷り越し本名
をさへ押隠して賣卜を糊口とし偽名を乾坤堂泰観と云居れり

第卅六は吉水が因果物語 (下)

かくて我身は神田明神下の裏惜家を住居とさし日々淺草の観音堂
または盛れる縁日などゝ人の群聚の地に出ては賣卜を爲す中にも
若や你か妹よ出あひはせぬかと夜晝に心を盡して尋ねれど夫さへ

終つ空だのゆ影も容も見にされば其氣疲やら老病やら去年の春か
 ら夏へうけ半年ばかりの長煩らひ素より貯はへの金もさく醫藥の
 料も詰りしより隣家の女髪結にておさとし云る深切者折々見舞て
 吳ゆへ頼みどの短刀を本町なる玉城の家の若主人へ事情を話して
 質に入れ百兩の金借出し其金を以て漸々と名醫に診り良藥を服し
 疾病はやがて全快せしが盡頃如何なる譯ありてか玉城の店よて小
 鳥の五郎三と云曲者が召捕れ番所にて調られると玉城の番頭善六
 と馴合ての騙局の科彼の信國の短刀を竊かに店より持出して勘當
 中の若主人よ罪を被せんと玉みしも其惡計の顯はれて終つ短刀の
 詮議となりしが抑信國の短刀の堀田家重代の寶刀にて前年紛失な
 せしより當時穿鑿中にあり其を何者の所持あして玉城へ質入なし
 たるかト其源の詮議となり猶其品の正しからざる廉を以て玉城の
 隠居は云も更なり若主人まで番所へあかられ嚴しい糾明よ遂て居

ると聞て我身は驚ろきしが是ぞ此身の棄處今ある事實を申し立他
 の難義を救はんと獨り決心は爲されども左すれば若も深切に取次
 くれしおさとしに難義を掛ての恩を仇と思案に暮て居る中よ玉
 城の親子はあ慈悲にて町内預となりしと聞き漸やく少しの安堵
 なせしが去とて此身を安穩よ江戸へも置れぬ時機なれば消費殘餘
 の金の半を分ておさとしのへ竊かよおくり沙汰をもせず同處
 を立去り此銀倉へ足を止め鶴ヶ岡の華表前にて日々賣卜を爲居る
 に今日圖らずも室内の孫に當れる婦人の來られ詳しく聞し身の上
 ばなし借つと我身の死期を早め斯々云々と云きかせしは今宵あし
 にて撃るゝ覺悟トはいへ婦人の良人をば我俸とは知らざりしが現
 在父が生の子よ斫れて死るも前世より定まり來る因果の未はや斯
 なれば望みも足る俸にあらぬ室内伴三我首撃て左内どの、修羅の
 妄執晴されよ猶豫なすは撃れぬのか早々撃よ此賊首

第卅七の如法闇夜の闘争

伴三の唯茫然と夢よ夢見し心地して何と言葉もあらばこそ悲狀に暮て居りしが父が臨終に其身の上を詳しく告げば分明すまじト早くも胸よ思案を爲し言葉少なに是までの身の成行を物語れば伴左衛門の苦痛の中にも彼の政五郎が俠氣よ感じ只願自身の先非を悔ひ左程に恩義を受たる人の娘を妻になすからは他人のみか敵の此首疾く環おとして持参なし義理ある父の墓前へ手向多年の恨を晴されヨ永く脚躰なしをらば人目にかゝりて妨たげあらん汝も武士の悴にあらずや何時まで苦痛を爲せ置くぞト叱り付られ是非なくも現在父と知ながら刃をわてる胸ぐるしさに如何せばやと猶涙ふ折彼方よりして何者か此方へ来る足音に伴左衛門のいよ急立ち再回罵り勵まされ今は早是までト覺悟きはめて後へ廻り振かざしたる刃の下首は前にぞ落たりける伴三口よ唱名し手早く父

の片袖もぎどり首を確と押つゝみ刀の血を押ぬぐふて殘る屍體を伏をかみ南無阿彌陀佛彌陀佛と二回三回唱へ了り纏て其場を立去んと半丁あまり歩行ゆく時今まで返たる空の月の忽雲間に隠れ入て如法闇夜の樹下蔭黒白も分ぬ此方より顯はれ出し一個の男手拭をもて頬罩し三尺帯に尻端折腰に何やら袂さみて窺ひく伴三の刀の鎧を楚と取る拿られて驚ろく伴三を兩三步ひき戻せば些ども騒がず身をひねり一揺揺て振らひ又もや進み往んとするを男は再回歩を寄て彼の伴三が抱へたる首の包よ手を掛つ奪ひ取んと争ふよぞ伴三ますく焦燥て早くも其手を振はらひ男の右腕拉ひしがんど身をふり回して挑み合ふ黒白赤き闇に拳と拳揚る腕の早蕨をすまきよ受る手練の働らき顔も認めず足下も進退不便の減多打蹴ちらす小石に踏すべり互ひに左右へ踏地くく轉ばんとして踏どいまり双方且らく透し見てねらひ定めつ又再回男は打ん

第卅八の強請のかた袖

と衝と進むを伴三あゝぞと突出す拳の返よ其男は腋吐いたく撲ら
 れて苦と一聲雲時も得たへず後へも動と仆れたる音は聞とも見え
 ぬかねば此間に早くと伴三は杉の木の間をバタ／＼と
 聞よまされを伴三の逸散ばしりよ我家へ歸り袖よ包みし一品を密
 と佛櫃の中よ入れ其夜のあつゆも聞れても物も得いはで打臥しが
 心の勞か翌朝の四ッ過るまで起も出ず頭是なき子は何にも知らで
 爺さん起て飯わがれと揺めあされて漸々に臥床は出ても何となく
 心すまねば自づから面よ出る不快の色を女房あつゆの熱々見やり
 ゆふべの甚く遅かツたゆる何の話しと聞なんだが八幡さまへ參詣
 しても彼の御利生の有ませもんだかソレハ爾ど如何さんしたやら
 今朝はあまへの顔色がきつうわるいが心もちでも良ないかエと聞
 れて伴三うち點頭きイヤモウ易者奴も欺されて昨夕の飛だ馬鹿を

見た餘り夜更よ歩行た故か今朝は如何やら風氣の様だト云つゝ立
 て庭口の井戸にて嗽盥をすませ家よもどりて坐よ直り今朝飯を喰
 んどて箸どりあぐる其折柄戸口より一個の男小腰をかめて入き
 たり眞平御免下さいませ此方は屑屋さんでございませすか少し買て
 お貰ひ申し度ものが有て上りましたト云つゝ置りし手拭を右手よ
 外して肩へ打かけ動乎と椽へ片胡坐見るより伴三箸を措きおれは
 能くお出なさいました屑屋は私くしてムいますかヤ其お拂ひ品
 の如何様お物でムりますか拜見いたしたうござりますト聞て男は
 此方へ對へるの賣物は此片袖いくらの直打が有ますかト突いたし
 たる其品は慥かよ昨夕片袖を引裂きたりし残りの袖とおもへば驚
 ろく伴三を斜目よ睨んでせゝら笑ひヲ屑屋さん何もそんなよ吃
 驚するよヤア及ばぬへ昨夕八幡の杉林で暫爾と見かけた此合袖右
 か左りか黒闇で確とは夫と見とめぬと抱へて逃る其途で摩ちがツ

たは借かよ此方俺がどめるも聞ずして其ま、歸つて來なすつたが
 此片袖が無つたら無不自由で有だらうと態々持て賣に來た此方に
 有ちやア不用な品だがおめへの方では大切合袖外に直打の處の
 ぬへが血やら紅やら染ついて紋まで消たが古着の命だチイ屑屋さ
 ん幾干又買ておくんなさるト圖太くい入れて伴三は殆く當惑なし
 たりしが茲ぞと自から肚裏をすゑ膝をすゑめて男にむかひ何やら
 容子のありさうなお拂ひものトのいへ屑屋に不向な片袖先々ある
 どのり申しませうヨ

第卅九は峰の松が報恩

側そばに聞居きこる女房にようぼうおつゆ知ぬ男おとこと伴三ばんさんが何やら争そふ言葉の端々仔細しじゆあり氣に思はるれば不審ふしんながらに親へば男の少し言語を荒らげ
 なんだとエ屑屋さん此片袖は不向だと成ほど其方よヤア不向だら
 うが愈々買ぬと云なさりヤア此合袖あひさきを尋ね出し土地の役場へ持て

出て昨夕の始末を訴人するが夫でも知ぬと云さるかと云れそ伴
 三薄氣味うすきみわるく是は做たり如何したものです買ぬと云なら訴人す
 るとか去とては又不法を押し買成何と私しも商葉柄お貸ひやさぬ事
 もなければ爲して直段の幾干程と優しく出せば付込でいかさま爾
 なくては何のぬ處おまへが素直に買と云なら大負にして五拾兩ナ
 ント安いもんぢやアねへかト烟艸たばこ薫らす悪体顔伴三は壓氣に制れ
 返辭もなさで居るを見て男は何も此方に對ひ返辭のぬへのは不得
 心か但しは得心したと云のか五十兩で引取れば今合袖の詮議を
 爲て土地の役場へ訴たへやううト追詰られて伴三が當惑おしたる
 其折柄此家を尋ねて入來りしは彼の不知火が弟子の角力峰の松大
 次郎にて今しも争ひ居る男は峰の松を見るより早く逃出さんと
 する處を領頭擱んで引たふし側そばにあり合細細にて高手小手に縛し
 め置き峰の松は伴三夫婦に絶て久しき面會の會釋ろこく云る様

今日は如何なる吉日もや貴公方にも御目にかゝり又爰に居る曲者の以前師匠の弟子になり片車一之助と云哉郎て有たが性質て悪事に長け師匠の金や品物を散々盗んで逃出ししが其後聞は追々に悪黨仲間顔も賣れ今でハ小島の五郎三が一の假子も成て居て頃日人の噂では豫々貴公がさづねて居る防門信國とやらの短刀も此奴が持て江戸を走け此鎌倉へ来たとの事今日また如何して此處へめぐりくゝて来て居たか情も不思議と云ながら峰の松ハ立あがりて其曲者の腰なる物を取来りて衣より出す短刀一口若や夫かと伴三もあつゆも其首へ立出て中刃を篤ぞ改たむれば擬ふ方なき防門信國銘さへ定かよ讀得たれば是は有難し忝じけなしと伴三夫婦は三拜九拜手の舞足の踏を知らず多年の望み足たりとて喜こび互むも道理なり

第四十ハ大團圓の紋切形

去程よまゝ伴三ハ昨夕よりの一伍一什を峰の松に物語り那の佛壇の中よりして實父の首を取出しおつもよ迄示せしにぞお露も始めて夫と知て驚ろく事一方ならず三人顔見合せて唯悄然たるばかりなりしが稍あつて伴三は峯の松に打對ひ今日圖らずして生の思ある父を失なひ又圖らずして此短刀を得ると云も誠よ不思議の次第よして世よ云約束事ならんが我身一つよ吉凶の胸よあつまる此苦しき責ては室内吉水の義父と實父へ菩提のためト云つゝ信國の短刀にて番弗ツと研らへば女房あつゆも猶豫せず縁の黒髪きり棄て忽地に入る菩提門伴三再回いへるやう唯此上の頼みと云いあつゆの親父政五郎が遺言たれよ此短刀幸はひ是なる政吉奴を家督よ立て貰ひたければ俱々江戸へ連歸り先御番所へ和主から一伍一什を訴たへ出て思よあるなれ恨もなき玉城の家の方々の赦免を早う願ふて下され又二ツには堀田家へ此短刀を持参なし詳しく仔細を

進達しきは室内左内が名跡ハ必らず再興の御沙汰あるべし爾なる
 上ハ此小僧の行末お世話をお頼みす我等夫婦ハ是よりして父が
 首を埋葬なし夫より諸國の靈場を巡拜なして發心の本意を達せし
 其上よて御縁もござらば又重ねてト云つゝ支度あす程に當惑あが
 らも峯の松は泪うかめて感じ入り泣入る小兒を慰さめつゝ否みも
 されぬ大切の頼み委細承知と云ばかり言葉もあらで居たりしが斯
 て長居を做たらんよは夫婦が今の發心に妨たげあさんと心づき急
 に其場を立あがり縛置たる曲漢の繩を左手に政吉を右手よ抱きて
 此里の役場へあそは往過けれ斯て峯の松は曲漢の兇狀を申し述て
 此里は役場へ渡し直ちよ政吉を伴ふて日あらず江戸へ歸り來り
 先本町の名主へ懸りて即日此趣むきを奉行所へ訴たへしにぞ防門
 信國の持主其他始めて黑白明瞭し直ちよ玉城芳右衛門親子の者は
 携へなき旨を以て歸宅を許され兇賊小鳥の五郎三并びに玉城屋の

番頭善六片車一之助等は後に相當の刑罪に處せられしと云されば
 又峯の松は堀田侯の重役方へ防門信國の短刀を持參して故政五郎
 が苦心より伴三が艱難よ因て此短刀を詮議し出したる趣き事落も
 なく進達せしにぞ重役方も深く親子の衷情を察ありて早々君侯
 の上聞よ達し思召を以て更に室内左内が家名を興させ左内が玄孫
 なる政吉を以て相續仰せ付られたりぞ猶また新よし原江戸町一
 丁目の尾彦樓へ賣れたる伴三の妹あうめの唐歌ハ句引されの身の
 上とて公邊よりの御沙汰よて尾彦樓より召はなされしが密邊なき
 身を憫然よおもひ且ハ素性も賤げならぬ者と分り是まで芳次郎と
 の交情をも想ひ遣て玉城の隠居芳右衛門は彼の女髪結あささを尋
 ねて媒妁を委ね更よ下總成田驛の旅人宿海老屋の主人を親元にし
 て千秋萬歳の婚姻を整のへお梅と芳次郎は望みの通り晴て夫婦の
 縁を結び目出度一家榮々しとぞ是はこれ慶應末年に有たる事よて

百

今猶世にある人々の秘に、文中の誰彼を御ぞんじの向もあるべし
諸早拙筆の長談義先爰にてめでたしくヤン／＼(御退屈を)

雪月花今様優染

雪月花今様優染終

明治廿四年十二月廿六日印刷
明治廿四年十二月廿八日出版

編輯者

町田宗七

日本橋區新右衛門町十番地

印刷者

岡澤辰之助

同所

發行所

